神戸市看護大学

地域連携教育・研究センター

５年間（2014 年-2018 年）の活動実績総括

刊行に際して

この度神戸市看護大学における地域連携教育・研究センターの 2014 年から 5 年間の活動報告書を刊行することになりました。本学の活動に多大なご指導、ご協力くださいました皆様に感謝申し上げます。

報告書の刊行に際して、このセンターの歴史的背景を少し述べさせていただきます。

神戸市看護大学は、未曽有の被害をもたらした阪神淡路大震災が発災した翌年である１９９６年４月に被災地神戸に開学し、２４年間の歴史を紡いできました。２代目学長の池川清子氏が開学２０周年記念誌のなかで「神戸市看護大学は、文字どおり大震災からの復興を願う人々の祈りと期待に支えられて誕生したものと痛感していました」と述べられ、だからこそ「本学は、市民の命と健康への思いを汲み取り、その安寧のために思慮深く対応できる知識と技術を備えた看護専門職の」育成を行ってきた」と語られています。大災害の被災地であった神戸に誕生した大学だからこその覚悟であったように思えます。実際に本学は最初の 10 年間は、主として地域の人々の健康と福祉への洞察が深く実践力の高い看護職の育成に力を注いていたように思えます。

しかし、その教育の成果と本学の将来展望が評価されて、文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援」（現代 GP）のひとつとして 2006 年 10 月から 2009 年 3 月まで「地元住民と共に学び共に創る健康生活―住民による教育支援と学生による地域支援の融合と e ラーニング」の活動を西区の住民の皆様、行政および看護専門団体との連携のもと展開いたしました。現代 GP に採択されるのは極めて難しいことでしたので、快挙といえます。本学が看護学の基礎・大学院教育を地域連携のなかでさらに発展させる重要な契機となりました。

現代 GP の文部科学省からの支援が終了した後、本学は継続して地域連携を深めるために 2009 年度に「神戸市看護大学健康支援地域連携センター」を開設し事業を継続しました。これが現在の地域連携・教育センターの原点です。

その後、2013 年には「文部科学省・知の拠点整備事業」（COC）に採択され、「地域住民と共に学び、共に創るコミュニティケアの拠点づくり」事業を 2 年間展開しました。この COC 採択も単科の看護系大学としては快挙であったといえます。本学の地域貢献の特徴は、地域との深い結びつきを看護教育に取り込み発展させてきたところにあるといえましょう。よく大学の地域貢献というとき、主として教員の研究活動等から得た知見を地域に還元するという手法を取ることが多いのに較べると本学の特徴が際立つように思えます。

この報告書では、いかに地域の関係者の皆様に本学の活動にご協力・ご尽力いただいているかがわかります。心から感謝申し上げます。

現在は新型コロナ感染症が世界全体に蔓延するパンデミックに人類の英知と胆力を生かした対応が求められています。神戸市看護大学は、市民の命と健康への思いを深くし、今まで培ってきた専門的な知識とネットワークを生かして、新たな取組をしてまいります。地元の市民の皆様に少しでも役立つ大学としてこれからも鋭意努力をしてまいりますのでよろしくお願い申し上げます。

皆様が新型コロナ感染症による被害が少ないことを祈念しております。

学長　南　裕子

５年間の活動実績の総括

神戸市看護大学は、阪神淡路大震災の翌年４月に開学し、以後、社会貢献を大学の一つの方針として掲げ、2006 年に現代 GP 事業への採択、2013 年に地の拠点整備事業、2015 年地域創生事業・兵庫神戸プラットホームの参加校となる等、それぞれの事業実績に基づき文部科学省大型補助金を獲得し、教育・研究の一環として社会貢献活動を行ってきた。具体的には、まちの保健室活動（健康支援、子育て支援、こころと身体の看護相談、物忘れ看護相談）、コラボカフェ、プレパパ・プレママセミナー、竹の台ふれあい祭り、命の出前講座、教育ボランティア導入授業、地域との関連研究等、数多くの活動である。本報告書は、過去 5 年間（2014-2018 年）の本学の地域連携教育・研究センターの活動実績を総括し、今後の本学の地域貢献活動の在り方を考えることを目的に作成した。

学校教育法（第 52 条）では、大学の使命は教育・研究・社会貢献とされ、教育研究の成果を広く社会に提供することが求まられる。大学のシーズと地域のニーズのマッチングの観点から本学の地域貢献活動を振り返ってみると、地域住民のニーズをある程度満足させられるテーマや支援活動ではあった。しかし、一方、学部学生の取り組みへの参加状況はそれほど多くはなく、マッチングの達成度は高くないと考える。この点については、まちの保健室、コラボカフェ等の報告書を参考にされたい。しかし、地域貢献を積極的に科目として取り入れている助産学関連科目（助産学専攻科→大学院助産学実践コース）では、学生たちが主体となり、企画・運営、実施、評価がなされており、学生たちの主体的学びを強化し、参加住民の満足度を高め、また、交流、フィードバックが得られ、大学ならではの社会貢献として大学シーズと地域ニーズのマッチングが行われていた。

5 年間の本学の社会貢献活動の総括から得られた示唆は、地域住民の経年的なデータを残し、研究においてそのデータを生かし、研究成果を社会貢献として生かしていくこと。また、学部カリキュラムについては、今以上に地域に興味を持てる必須科目を増やし授業を通して地域住民の生活や健康活動を学ぶ機会を増やすこと、つまり、看護学を地域の中に拡大できるカリキュラムを考えることである。

COVID-19 の世界的パンデミックにより、今後の世界のありようは大きく変化する可能性がある。看護教育においても、看護師、保健師の指定規則に依拠したカリキュラムではなく、地域コミュニティで学びを深められるような自由度の高い教育の展開を期待したい。

2019 年度　地域連携教育・研究センター
センター長　石原逸子

目次

刊行に際して・・2
５年間の活動実績の総括・・3
I. 地域貢献活動
地域貢献活動の５年間のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
まちの保健室 ・・6
コラボカフェ ・・21
プレパパ・プレママセミナー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
竹の台ふれあいまつり、竹の台総合新聞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
命の感動体験・・35
命の出前講座・・38
トライやる・ウィーク・・40
看護専門職講座 ・・44
HAT 神戸復興住宅における出前講座・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47

II. 教育・研究活動
教育 ・ 研究活動の５年間のまとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50

III. 国際交流活動
国際交流活動の５年間のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70

関連業績

I. 地域貢献活動

I. 地域貢献活動の５年間のまとめ

まちの保健室の５年間活動実績

Ⅰ.はじめに

神戸市看護大学「まちの保健室」（以下、本学「まちの保健室」）は、地域住民を対象者として、出産・子育て、こころの健康、生活習慣病や介護等、健康に関する様々な健康上の課題に、看護教員が相談に応じることで、地域住民の健康維持・増進を目指すことを目的に平成 17 年 12 月に開設された。当初は１つの拠点であったが、平成 18 年には「子育て支援」「こころと身体の看護相談」が開設された。さらに、平成 24 年に「もの忘れ看護相談」が開設され、令和元年現在は、4 拠点の活動が展開されている。

本学「まちの保健室」は、兵庫県看護協会と連携した活動で、活動に必要な物品については一部協賛をいただいている。「まちの保健室」の活動は兵庫県看護協会神戸西部支部「まちの保健室推進委員会」にて、定期的に報告すると共に、学内にむけては地域住民のニーズの変化や運営上の課題に対する改善案を提案し、効果的な活動ができるよう調整を行ってきた。

この学内の調整は、「まちの保健室」運営会を通して行っている。この運営会は神戸市看護大学「地域連携教育・研究センター運営委員会」の下部組織として、各拠点の事業目標に沿った活動内容の評価と年間計画の立案を行ってきた。また、平成 26 年度から平成 30 年度には、地(知)の拠点整備事業「地域住民と共に学び、共に創るコミュニティケアの拠点づくり」の一環として北須磨地区に「まちの保健室」の出前という位置づけで活動を行ってきた。

今回、平成 26 年度から平成 30 年度の 5 年間にわたる本学「まちの保健室」の活動をまとめたので、ここに報告する。

Ⅱ.各拠点の活動概要および教育上の効果、課題

1.健康支援

1）事業目標

「健康支援」では、①参加者が健康に関する知識や技術を得ることができる、②参加者が各種の測定を通して、自身の健康状態を知ることができる、③参加者が『まちの保健室」で獲得した健康に関する知識や技術を活用して、自身や家族、友人等の健康を維持・向上するための行動を起こすことができることを事業目標として掲げ、地域の集会場もしくは大学内施設において、健康教育と健康相談、必要なケアと共に、地域住民の交流の場を提供している。

運営に関わる看護教員は、基礎看護学分野、公衆衛生看護学分野、慢性病看護学分野、急性期看護学分野、在宅看護学分野の 5 分野である。

2）活動内容

「健康支援」では、例年実施している重点課題のテーマと、不定期のトピックスなテーマがある。例年実施しているテーマは、「糖尿病・高血圧予防」「フットケア」「体力測定」「訪問看護」（在宅介護）で、これらはセルフケア・予防行動の促進と高齢社会における介護ケアに関する内容である。プログラムの展開方法は、講義と体操といった実践演習、個別相談を適宜組み込み実施している。

トピックスとして取り上げたテーマは、「アロマオイルを用いたケア」「応急処置」「熱中症予防」であり、これらのテーマは、これまでの参加者のアンケート結果の自由記載に書かれた地域住民のニーズと各分野の専門性を組み合わせた内容である（表 1）。

表 1.「健康支援」開催テーマおよび運営・参加者数

年度	開催日	テーマ	参加者数	運営スタッフ		
				教職員	学生・院生	地域住民
平成26年度	5 月 15 日(木)	50 歳から増える「糖尿病」とは？	39	5	1	6
	8 月 7 日(木)	知って得する応急手当 （AED＆心肺蘇生ほか）	20	5	0	0
	9 月 25 日(木)	男性のための介護教室	14	4	0	0
	10 月 9 日(木)	生活体力を測ってみませんか？	63	9	8	6
	11 月 15 日(土)	アロマオイルを用いたケア	125	7	0	6
	小計		261	30	9	18
平成26年度出前	5 月 22 日(水) 須磨パティオ	笑いと健康～笑いで認知症予防～	32	4	0	0
	9 月 11 日（木） 竜が台地域福祉センター	地域住民の健康の傾向と介護予防、 フットケアに関する講義	24	3	0	0
	9 月 16 日（火） 菅の台地域福祉センター	地域住民の健康状態の傾向と介護予防、疾病予防、 栄養に関する講義	56	3	0	0
	小計		112	10	0	0
平成27年度	5 月 21 日（木）	いきいき糖尿病ライフ	28	5	2	0
	7 月 24 日（金）	足は第 2 の心臓です ～簡単！足脳マッサージ	34	2	1	3
	9 月 25 日（金）	男性のための介護教室	8	4	0	0
	10 月 30 日（金）	生活体力を測ってみませんか？	89	7	19	6
	11 月 14 日（土）	アロマオイルを用いたケア	70	7	11	0
	3 月 14 日（月）	やってみよう！心配蘇生法と AED	28	6	0	0
		小計	257	31	33	9
平成28年度	5 月 12 日（木）	もっと知りたい糖尿病	23	4	1	0
	8 月 28 日（月）	いざという時に役立つ心配蘇生法と AED	14	6	0	0
	9 月 14 日（木）	訪問看護って何？ ～訪問看護について知ろう～	29	6	0	0
	10 月 27 日（金）	生活体力を測ってみませんか？	102	10	17	6
	2 月 12 日（日）	フットの日～健康は足元から～	37	4	0	15
	小計		205	30	18	21
平成29年	5 月 31 日（水）	高血圧と上手な付き合いかた	48	4	2	0
	8 月 28 日（月）	もっと知りたい!!訪問看護	23	4	0	0
	9 月 14 日（木）	やってみよう!!応急処置	25	5	0	0
	10 月 27 日（金）	生活体力を測ってみませんか	95	14	20	15

3）参加者数と属性

「健康支援」は地域住民一般の方々を対象としている。各年度の参加者数は、延べ人数1,338 名で、最少 205 名、最大 373 名、平均 267.6 名であった。平成 26 年度は、地(知)の拠点整備事業「地域住民と共に学び、共に創るコミュニティケアの拠点づくり」の一環として実施された学外での出前活動が含まれており、参加者数が増加した。

参加者の属性は、女性が過半数であり、年齢は 60 歳代と 70 歳代を合わせると 60～70%を占めた。居住地は、概ねが西区内であるが、20%程度は近隣の区や他都市からの参加もみられた（表 2）。

表 2　「健康支援」参加者の属性

		平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	合計
性別	男性	69（50.7）	81（56.0）	84（44.0）	93（41.3）	87（33.9）	414（39.1）
	女性	67（50.7）	169（66.0）	106（56.0）	132（58.7）	170（66.1）	644（60.9）
年齢	50 歳未満	15（11.0）	50（20.0）	11（6.0）	5（2.0）	3（1.0）	84（7.9）
	50 歳代	12（9.0）	28（11.0）	10（5.0）	14（6.0）	13（5.0）	77（7.2）
	60 歳代	52（38.0）	78（31.0）	59（31.0）	68（30.0）	67（26.0）	324（30.5）
	70 歳代	44（32.0）	73（29.0）	86（45.0）	101（45.0）	121（47.0）	425（39.9）
	80 歳以上	14（10.0）	23（9.0）	25（13.0）	38（17.0）	54（21.0）	154（14.5）
居住地	西区	110（80.9）	153（68.0）	145（76.0）	189（81.0）	198（77.0）	795（71.2）
	須磨区、垂水区　他	26（19.1）	72（32.0）	119（24.0）	45（19.0）	60（23.0）	322（28.8）

※数値は、アンケート結果を用いて集計した。

4）健康支援の実施効果

各回ともに、個別相談や質問が多く、関心の高い方が参加していることが伺える。実施後アンケート結果の満足度は、「とても満足」が 40～70%、「まあ満足」が 20～50%であった。

5）教育上の効果

学生・院生の参加は、述べ 111 名が運営スタッフとして参加した。人数は、テーマにより異なるが、「糖尿病予防」と「フットケア」では、各回に数名の参加があり、健康教育の実施と個別相談を行った。院生は教員の指導のもと、テーマの選定から企画、実施、評価の一連のプロセスを体験する。この一連のプロセスを通して、院生は高齢者の健康への関心の高さや集中力を考慮した講義の時間（長さ）、資料のみやすさ、参加者が身体を動かす場合の安全面への配慮など多くのことを学んでいる。

「アロマオイルを用いたケア」は 11 名、「体力測定」では、編入生や保健師課程を履修している学生が 10～20 名参加し、各計測を地域住民のボランティアと共に実施した。

地域住民のボランティアは、延べ 82 名の協力が得られた。各活動の運営によって人数は異なるが、各回 9 名から 21 名であり、平均 16.4 名であった。

6）課題

健康支援の事業目標の「①参加者が健康に関する知識や技術を得ることができる」および「②参加者が各種の測定を通して、自身の健康状態を知ることができる」に関しては、各回の個別相談と質問の多さとアンケート結果の「とても満足・まあ満足」と回答された割合が高く、到達が出来ていると考えられる。これら結果から地域住民の健康ニーズに各回のテーマは概ね合致していると考えられるが、さらに企画を充実させ、地域住民のニーズをより的確に捉えるよう調査の実施等を検討する必要がある。

そして「③参加者が『まちの保健室』で獲得した健康に関する知識や技術を活用して、自身や家族、友人等の健康を維持・向上するための行動を起こすことができる」の事業目標に関しては、参加者のその後の健康行動や健康状態に関する追跡を実施していないため不明である。

「健康支援」は、5 分野の看護教員が関わっていることから、分野横断的に各分野の専門性を活かし、健康に関するデータ収集と分析を経年的に実施し、評価を行う必要性がある。得られたデータとその効果を広く広報周知を行うことは、本学と地域住民、看護協会との連携強化に繋がると考える。

また、参加者は西区以外の住民が近年増加しており、本学が地域住民の健康に寄与できるよう、広報を行う範囲や方法等の検討も行っていく。

２．子育て支援

1）事業目標

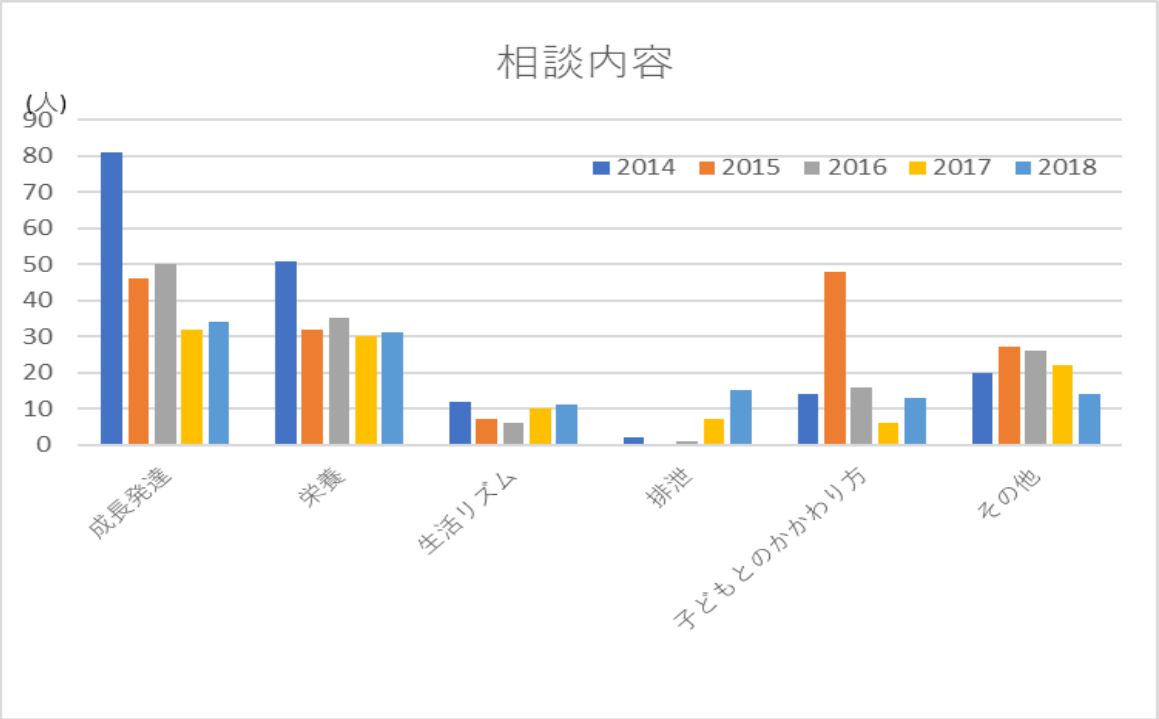
地域における育児支援の場を提供する取り組みとして、2006 年より実施している。子どもに関する相談と、参加した親子同士の交流機会の提供を目的としている。

2）活動内容

過去 5 年間の相談内容は、子どもの成長発達、栄養に関するものが多い。その理由としてまちの保健室の開催時間に相談に来られる利用者が殆ど乳幼児の保護者であること、乳幼児健診で指導を受け、心配になり改めてまちの保健室を利用することが考えられた。その対応としては、保護者の不安を傾聴し、計測、母子手帳の発育曲線に沿って説明を加える、発育曲線に概ね沿っていること、離乳食の進め方など、各家庭の事情に合わせて対応できていること、地域ボランティアと遊ぶ様子から認知発達や粗大運動・微細運動は月齢相当であることを、具体的に伝えることで、保護者の安心につなげている。2016 年までは、子育て支援に関する社会資源の情報を望む保護者には、コラボカフェの利用を紹介し

た（表３）。

表３．「子育て支援」相談内容

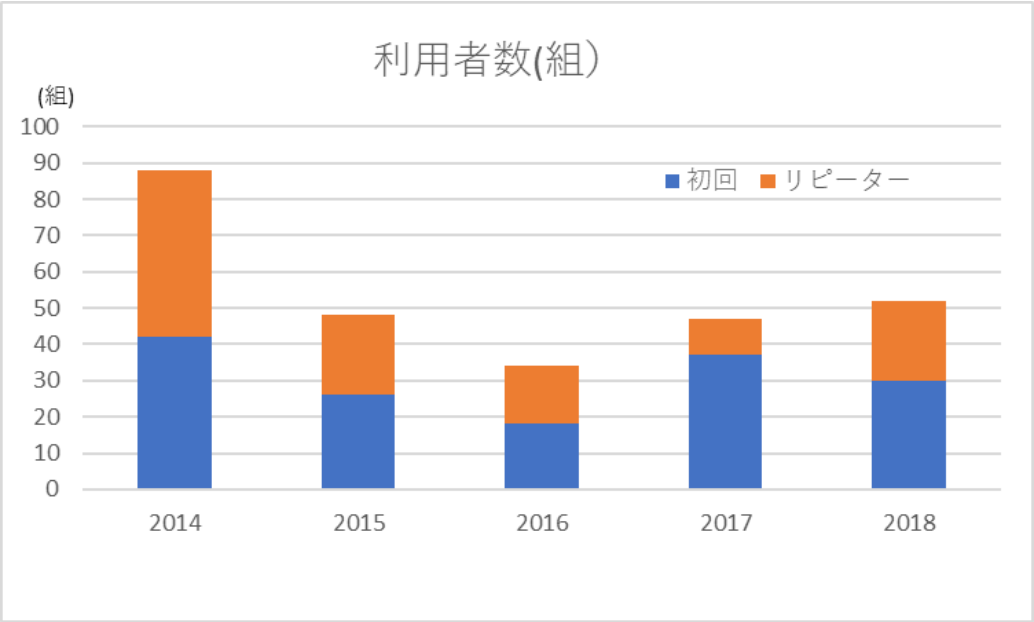


3）参加者数と属性

2014 年度は、コラボカフェを利用した親子が帰宅前に「身長・体重計測」を目的に利用するようになった。相談目的で来られた親子の対応に困難をきたしたため、コラボカフェに計測道具を設置するように手配した。その後、コラボカフェ開催日(火・木・金)ではなく、水曜日の開催としたため、コラボカフェ帰りの親子の利用が減少した。その結果、2016 年の利用者数が伸び悩んだことが考えられる。1 回あたり 4 名程度の利用者であったが、時間をかけて個々の相談に対応している。保護者の相談中には、地域ボランティアが子どもの遊び相手となり、保護者は、子どもの様子を見ながら、安心して相談に集中することができている。

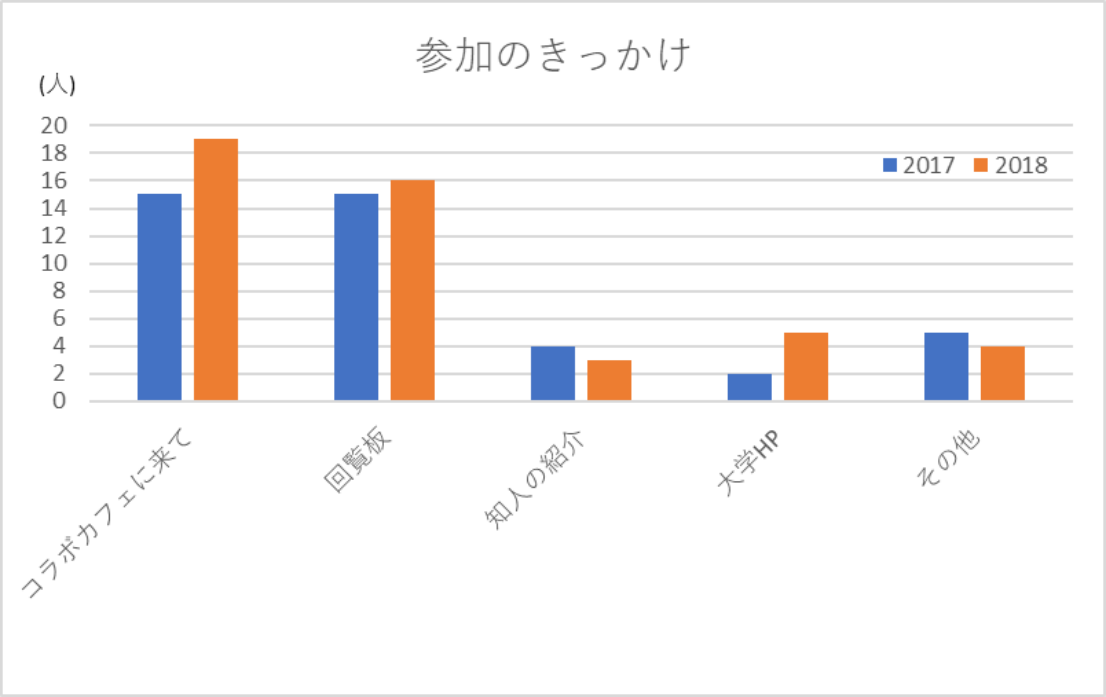
開催場所は、2006～2016 年は北館 1 階演習室を利用していたが、冷暖房の調整が難しいこと、利用者数が減少傾向にあることから、2017 年よりコラボカフェ内に変更した。6 回の子育て支援のうち、半分は午後のコラボカフェ開催時間と重ねたため、コラボカフェ利用者が気軽に相談を利用することができ、利用者数も微増した（表４）。

表４．「子育て支援」　利用者数



コラボカフェの利用者が学園都市駅周辺の居住者のため、回覧板等で情報を得ることもあるが、神戸市の子育てネットでの情報、まちの保健室のチラシを西神南や垂水、名谷駅周辺に設置したことから情報を得た、過去にまちの保健室を利用した友人に連れてきてもらった、という保護者もいた。大学のホームページも利用者が微増している（表５）。

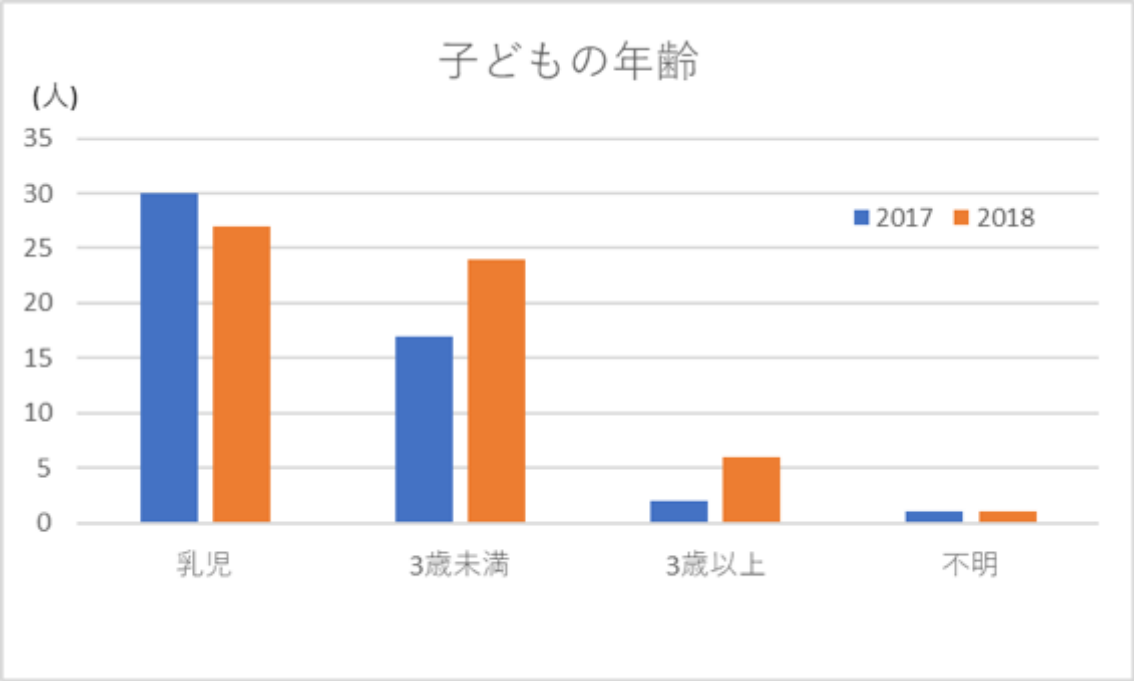
表５．　「子育て支援」参加のきっかけ（情報源）について



まちの保健室のリピーターの保護者や子どもは、幼稚園に入園を機にコラボカフェやま

ちの保健室の利用が、困難になる。その理由として、それぞれの開催時間帯に間に合わないことが考えられる。一部利用者は、終了時間間際（15:30）に駆け込みで来られる場合もある。その際は、食堂（学生会館）に場所を移すなどの工夫で対応が必要となる（表６）。

表６．　利用する子どもの年齢（子育て）



4）子育て支援の実施効果

子どもの発育に合わせて、保護者の関心や心配事は多岐にわたる。月齢の近い子どもや親との交流、少し成長した子どもの遊び方を見ることで、我が子の成長の見通しがついて、安心する様子もあった。

コラボカフェ開催時には、保育士が保護者に、まちの保健室の利用を勧めている。保護者や子どもとの信頼関係がある保育士であっても、保護者の悩みを改めて認識する機会になっている。

5）教育上の効果

小児看護学分野の教員、大学院生、地域ボランティアが協働している。コラボカフェでの開催時は保育士との連携により、健康な乳幼児を対象とした環境整備やおもちゃの工夫などを知る機会となる。小児看護経験のある大学院生は、自立して保護者の相談に応じているが、対応困難な場合は、教員に相談できる体制がある。また、病棟勤務経験があっても、健康な子どもの発育発達への悩みへの対応は経験が少ないため、子どもの発育発達を学ぶ機会となる。

6）課題

本事業は、乳幼児の子どもに関する相談と、参加した親子同士の交流機会の提供を目的

としている。

これまで、養育者が相談に集中したい時は、子どもの見守りは地域ボランティアに依頼していた。近年、本事業の地域ボランティアの確保が難しく、コラボカフェがない時には、事務局職員に子どもの見守りをゆだねている状況である。コラボカフェ開催日にまちの保健室の開催日を設定する等検討が必要である。

本学のまちの保健室の利用者は、乳幼児を対象とするため子どもの発育発達や基本的生活習慣に関する相談や話をただ聴いてほしいというニーズがある。相談時間に制限を設けていないため、その内容は疾患管理や児童発達支援に発展することもある。気がかりな相談者の場合は、許可を得て居住地の保健センターやかかりつけ医(実習病院に限る)につなげることもある。まちの保健室は、自律した住民への社会資源でありたいが、大学（教育機関）での対応の限界がある。一般化が難しい多様な相談と柔軟な対応を求められる子育て支援は、大学（教育機関）として将来どのように取り組むべきかが今後の課題である。

３．こころと身体の看護相談

1）事業目標

「こころと身体の看護相談(以下、看護相談)」は、ストレスや心の健康問題、ストレスに起因する心身の不調、家族員の心の健康問題などについて、地域の施設で個別の相談活動やケアを行うことにより、地域住民の心身の健康状態の向上を図ることを目標に実施している。

2）活動内容

看護相談は、2007 年 6 月より開催している。毎月 1 回、平日の午後 13 時 30 分より、一人当たり 40 分の相談を 12 人分の枠を設けて開催している。相談は予約制であり、大学の事務局に電話をする、または、来談時に次回の予約を取るという 2 つの方法をとっている。相談場所は、大学最寄り駅側の大学共同利用施設で、施設内の会議室や、講義室をパーテーションで区切ったブース内で、個別に面接を実施している。

広報活動は、神戸市看護大学前掲示板及びホームページへの掲載、「まちの保健室」のポスターへの情報掲示を行っている。また、「看護相談」独自のポスターを作成して、大学共同利用施設内掲示板をはじめ、大学所在地の自治会を通じて、西区を中心に大学周辺地域にある商業施設や診療所等の掲示板、回覧板への掲示・掲載を行っている。

3）参加者数と属性

過去 5 年間の相談件数はトータルで 422 件、その内訳は、新規相談件数は 53 件、継続は 319 件、一旦終結していたが再開した相談は 10 件、終結は 17 件、キャンセルは 42 件となった。2017 年、2018 年の 2 年間は、相談要員の人数が例年よりも少なく、相談体制を整えることができなかったため、広報活動を控え、開催も例年の 12 回より 3 回少ない 9 回となり、それに伴い、相談件数の総数も、例年よりも減少するという結果となった

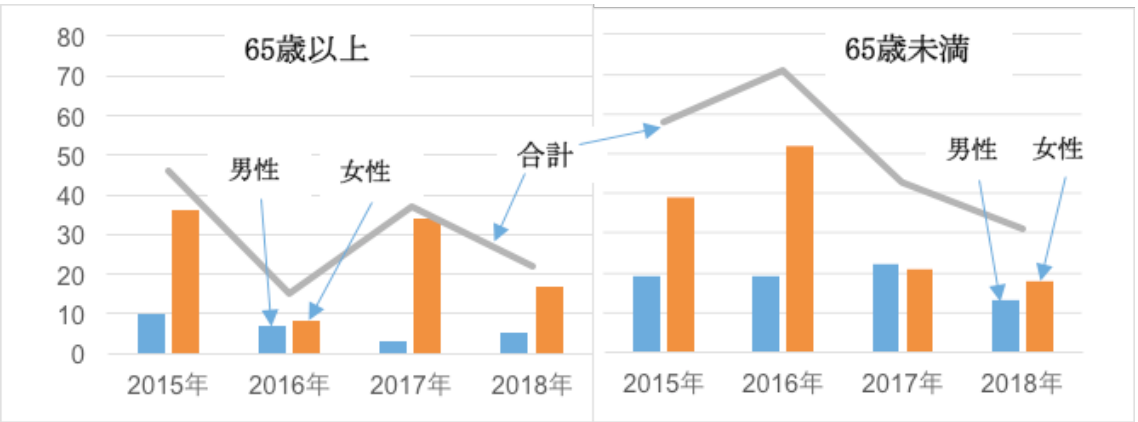
（表７）。

表７．「こころと身体の看護相談」相談件数（2014 年度以降）

年度	2014 年	2015 年	2016 年	2017 年	2018 年	合計
相談件数	107 件	98 件	84 件	80 件	53 件	422 件
うち新規	25 件	13 件	16 件	7 件	2 件	63 件

過去 4 年間の相談者の内訳は、65 歳以上男性は 7%、65 歳以上女性は 29%、65 歳未満男性は 23%、65 歳未満女性 40%であった。全体的には、男性よりも女性の相談者の方が多く、65 歳以上の高齢者よりも、65 歳未満の中高年の相談者が多かった。看護相談の開催日が平日の午後であり女性の方が参加しやすいことや、中高年の世代が情報を得やすいこと、子育てや介護、仕事、人間関係など様々な課題を抱えている世代であること等が、この相談者内訳の数値に影響していると考えられる（表８）。

表８．「こころと身体の看護相談」相談者の性別・年齢別内訳



4）健康相談の実施効果

開催回数は、看護相談を開始した 2007 年 6 月から 2018 年 3 月末現在、136 回となった。2014 年から 2018 年の過去 5 年間では、57 回の開催となっている。

相談件数全体の中でも、継続相談件数の多さが目立つことから、継続相談は、継続的に相談を必要とする人のニーズを満たしていると考えられる。継続相談と比較して新規の相談件数は少ないため、学園都市地区における回覧板や大学近辺で主に実施している広報活動について、今後、地域の拡大等も視野に入れて検討していく必要があると考える。また、継続相談者との相談の中で相談の目的やゴールを設定して、終結を目指していくことも、新規相談者への来談へとつながるのではないかと考える（表９）。

表９.「こころと身体の看護相談」相談件数の内訳（2014 年度以降）

	新規	再開	継続	キャンセル	終結
2014 年	15	3	55	—	4
2015 年	13	1	84	12	6
2016 年	16	0	62	14	6
2017 年	7	2	71	7	1
2018 年	2	4	47	9	0
合計	53	10	319	42	17

５）教育上の実施効果

相談を担当するのは精神看護学を専門とする看護教員及び大学院生である。初回に看護相談に来られた方に、「大学教員、または病院等で専門の臨床経験を積んだ精神看護先行の大学院生がお話を伺います」という内容のパンフレットをお渡して、了解を得ている。大学院生は、初回は教員と 2 人で相談に入り、継続の場合は 2～3 回目から一人で実施している。相談終了後に振り返りを行い、教員から助言等を受けて次回の相談につなげている。地域住民を対象とした月 1 回の看護相談は、精神看護専門看護師を目指す院生にとって、アセスメント能力や面接能力を向上させる上で効果的な学びの機会となっている。

6）課題

平成 19 年の開始以来、継続されてきた看護相談は、情報化社会の今日、様々な媒体から情報が得られる中にあって、「身近な相談の場」として機能しており(三浦,2012)、依然としてそのニーズは高いと考えられる。相談要員は、地域住民の方々の多様なニーズに応えられるように専門知識や技術の向上を図るとともに、広い視野から、時代に合った看護相談の役割についても探求していくことが必要と考える。

４．もの忘れ看護相談

1）事業目標

平成 24 年 3 月に開設した「もの忘れ看護相談」は、もの忘れや認知症の人とその家族が地域で安心して暮らし続けられるよう個別相談を実施するものである。

2）活動内容

平成 25 年度からは個別相談に加え、ミニ講義を行い、知識の普及および啓発に努めている。さらに、平成 26 年度以降は茶話会として意見交換の機会を設け、参加者同士の交流を促進する場としての機能も担っている。年間 4 回（5 月、7 月、10 月、12 月）開催している（平成 28 年度のみ 3 回）。

3）参加者数と属性

参加者数は年々増加傾向であり、平成 30 年度は 67 名と過去 5 年間のうち最も多い参加人数となった（表１）。全体的には女性の参加者が多い傾向にあり、特に 65 歳以上の参加者の増加がみられた。しかし、65 歳未満の女性参加者は減少傾向である。自身のもの忘れが気になり始めたことや、両親のもの忘れが気になったことが参加動機として挙げられた（表 10）。

個別相談の希望者はその人数および件数とも減少傾向であった。平成 27 年度までは個別相談希望者は 20 名を超えていたが、それ以降は半減し 11 名と横ばいであった。特に女性相談者の減少がみられた(表 11)。

表 11　「もの忘れ看護相談」個別相談者（名）　　複数での相談者含む

	平成 26 年	平成 27 年	平成 28 年	平成 29 年	平成 30 年
相談者数	22	21	11	11	11
男性	9	9	6	6	6
65 歳以上	8	8	5	6	6
65 歳未満	1	1	1	0	0
女性	13	12	5	5	5
65 歳以上	11	9	5	3	3
65 歳未満	2	3	0	2	2
相談件数	データなし	18(5)	11(3)	11(2)	11(2)

( )　継続件数

4）健康相談の実施効果

ミニ講義は老年看護学教員が認知症に関する最新情報を取り入れたトピックについて30 分間講義するものである。平成 26 年は、家族や地域における認知症の人との付き合い方や介護についての 2 回の講義後、もの忘れについての思いを共有するための茶話会、認知症に関する最新の話題についての講義を行った。平成 27 年度以降は、認知症に関する基本的知識について、認知症対策について、受診のタイミングや受診先の選択について、相談先とサービスについての講義を参加者の理解度や関心に合わせローテーションで実施した（表 12）。

表 12「もの忘れ看護相談」　ミニ講義テーマ

	平成 26 年	平成 27 年	平成 28 年	平成 29 年	平成 30 年
第 1 回目	ちょっと気になるうちの家族やご近所さん	地域で最期まで暮らすために～知っておきたい相談先とサービス～	認知症になっても地域で最期まで暮らすために～知っておきたい相談先とサービス～	認知症ってなに？どんな病気？	認知症ってなに？
第 2 回目	自分も家族もいきいきと～おうちで介護している方へ～	介護している家族もいきいきと～介護のリフレッシュ法～	身近にできる認知症への対策	認知症になっても地域で最期まで暮らすために～知っておきたい相談先とサービス～	身近にできる認知症への対策
第 3 回目	茶話会:もの忘れについての思いや感じていることを語り合いませんか	こんなときどうする？～認知症の人への接し方～	もの忘れかも？と思ったら～受診のタイミングと受診先の選び方～	身近にできる認知症への対策	認知症とともによりよく生きるために～知っておきたい相談先とサービス～
第 4 回目	認知症に関する最新の話題	もの忘れかも？とおもったら～受診のタイミングと受信先の選び方		もの忘れかも？と思ったら～受診のタイミングと受診先の選び方～	もの忘れかも？と思ったら～受診のタイミングと受診先の選び方～

ミニ講義終了後の茶話会では、毎回ボランティア参加いただくあんしんすこやかセンター（神戸市の地域包括支援センターの愛称）の保健師とともに、自身のもの忘れに関することや、認知症予防のために日常生活で気を付けていることなど、参加者同士が活発に意見交換されていた。ミニ講義と茶話会のどちらにも参加することで、日頃不安に感じていることが軽減したという感想があった。

個別相談については、ご自身についての相談が多く、次いで家族、友人や近隣の方につ

いての相談であった。ご自身についての相談はもの忘れに関する内容が最も多く、認知症と診断された後のサービス利用相談などもあった。家族についての相談内容としては、認知症疑いの家族の受診についての相談や、認知症専門医療機関の紹介および、社会資源の情報提供に関することであった。友人や近隣についての相談は、認知症の疑いがある友人・近隣の方との接し方が知りたいという内容であった。

５）教育上の実施効果

学生ボランティアとして毎回大学生あるいは大学院生が数名ずつ参加した。ミニ講義を聴講した後、個別相談の記録係として同席することで、認知症とともに生きる本人とその家族の思いや生活上の変化および困難を聴き、実際の認知症に関するニーズは何か、看護師としてどのように応えるのかについて考察する実践的な機会となった。実施後は教員およびボランティア学生間で意見交換をする機会を設け、学生の学びや感想を共有した。参加者の学習意欲の高さを目の当たりにし、自らの学習態度を反省したという意見も聞かれた。

６）課題

参加者数は増加傾向であることは、2019 年 1 月から『認知症の人にやさしいまち「神戸モデル」』が始まるなど、この数年において市内でも認知症関連広報活動がさかんに行われたことが影響していると考えられる。この神戸モデルの普及活動において、市民が認知症にまつわる情報を容易に得られるようになったことや、認知症関連の事件や事故事例の紹介など、その対象となる本人や家族の認知症への関心の高まりがあった。さらに、茶話会は大学院生および大学生が加わることで明るく楽しい雰囲気となり、地域高齢者の交流の場として本事業への継続参加の動機付けとなった。今後もより効果的な運営を計画していきたい。

III. おわりに

平成 17 年に開設されたまちの保健室は、「健康支援」「子育て支援」「こころと身体の看護相談」「もの忘れ看護相談」の 4 事業を展開し、年開催回数は 27 回となっている。地域住民の参加者数は増加傾向であり、平成 30 年度には延べ 243 名の多世代にわたる方々にご利用いただいた。今後、地域医療構想の実現や地域包括ケアシステムの推進に向け、地域の多様なニーズに沿ったまちの保健室事業を展開するためには、地域住民およびサービス資源と連携協働体制を構築していくことが不可欠である。

大学の地域貢献の取り組みとして、平成 18 年文部科学省現代ＧＰ事業「地元住民と共に学び共に創る健康生活」において、ライフステージを通じての疾病予防と健康増進活動を地域教育ボランティア、学生ボランティア、教員が一体となって実施したことにはじまり、平成 25 年より 5 ヵ年計画で実施された文部科学省「地（知）の拠点整備事業」では、

「地域住民と共に学び共に創るコミュニティケアの拠点づくり」として、地域住民の暮らしの理解、医療連携の強化、在宅ケアの推進につなげる継続看護および訪問看護についての基礎知識を身につけた人材育成を目指した取り組みを行った。また、本大学では地域社会の保健・医療。福祉に貢献する看護専門職の育成が使命である。ディプロマポリシーにおいても、地域住民の健康問題を捉え、主体的に地域活動に参加する人材の養成を挙げている。

様々な年代の地域住民の方々と交流する機会となるまちの保健室事業は、地域に貢献する看護職の養成において有益である。大学内開催という特色を生かし、学生が様々な年代の地域住民の参加者と健康について語り合う機会を提供することや、まちの保健室関連科目を基礎教育カリキュラムに組み込むことで、地域の健康課題について考え、解決にむけて取り組む学習の機会を増やすことで得られる学習効果は本学の教育理念に通ずる。さらに、大学院生や教員の研究の場として本事業を活用するなど、地域社会に貢献できる教育・研究体制の充実化についても今後検討を継続させる必要がある。

（文献）

総務省、第 1 部特集人口減少時代の ICT による持続的成長、平成 30 年度版情報通信白書
http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h30/html/nd142110.html,2018

三浦藍,安藤幸子,中島友美,山岡由実,小倉弥生.(2012).神戸市看護大学“まちの保健室”『こころと身体の看護相談』の活動実績とその評価.神戸市看護大学紀要,16,69-76.

コラボカフェの５年間活動実績

背景：

2011年10月に神戸市保健福祉局子育て支援部から本学施設を活用した神戸市地域子育て支援拠点事業「ひろば型」として打診され、2012年３月に開設した。

目的：

大学施設を利用した①学生と住民の参加を通して、親と子が健康に育つための子育てを支援すること、および②学生が健康な生活を支援できる看護職者として成長すること、また、それらにより③大学の発展に寄与することである。

対象：

定頸(4か月ごろ)～3歳までの未就園児とその保護者（2013年４月以降―）

運営：

開催日時：週３回（火・木・金）、10～12：30，13：00～15：30の１日５時間である。スタッフ：保育士2~3名（大学で直接雇用）

実施事業内容：

①子育て中の親子が交流できる場の提供、

②子育てに関する相談、

③親子の健康づくりに関するイベント、地域の子育て情報の発信

＊学生の参加は、利用者の状況を考慮し、受け入れは３名程度としている。

実施主体：

①神戸市看護大学「コラボカフェ」運営会（以降、運営会とする）

事業が円滑に行えるよう事業計画、調整等。

②運営会の構成メンバー、

地域連携教育・研究センター委員（教員７名）

事務局、保育士（４名）

＊委員は運営会に参加し、企画、事業実施に関する学内への協力依頼、活動評価、物品管理、広報、会計などの役割を担当。運営会で協議した内容は、地域連携教育・研究センターで報告・協議。

コラボカフェ事業の実際：

１）過去７年間のコラボカフェ利用者の推移（図１、図２）

①新規利用者登録者数300組前後、平均利用者数20-25組/日

②保護者481名（2018年度）の所在

学園都市225名（46.8%）、西神南52名（10.8%）、舞子35名（7.3%）

西神中央33名（6.9%）、

③来所回数（2018年度）

10回以下/年　414名（86.1%）

10-20 回以下/年　35 名(7.3%)
20-50 回以下/年　21 名（4.4%）
50 回以上/年　11 名（2.3%）

2)学生の参加状況（図３）と活動状況（図 4、2018 年度）

①1.8-7.8 人/月
②前期に集中（スタートアップセミナーによるレポート作成のため）

３）利用者へのアンケート調査結果（図 5、図６）

①全体の 6 割が不定期に参加、1-3 回/月利用は 1 割
②無料（9 割前後）、気軽に利用できる（8 割前後）、おもちゃの豊富さ（7 割）、利用者同士の交流ができる（5 割）、保育士に相談できる（4 割弱）
＊学生との交流や看護教員による相談への期待は少なかった。

４）子育て支援事業を導入している近隣大学の事情

①市内 7 大学（神戸学院大学、神戸常磐大学、神戸教育短期大学（旧夙川学院短期大学）、神戸親和女子大学、神戸大学、甲南女子大学、神戸松蔭女子学院大学）
②5 大学/8 大学（本学を含む）が子育て広場を大学内施設で提供
＊神戸大学:夕方から夜間に学童期の子どもの受け入れ
③子育て支援等の講習には、常駐している保育士や幼稚園教諭による行事、学部生による実習授業（道城ら，2015）、子育て支援プログラム（森本ら，2013）、や保育士や大学教員、外部講師による子育て支援の情報提供や相談

5) 本学における教育研究活動の実績（2018 年度まで）

①保護者を対象にした健康教育を実施(2012 年のみ)
②「小児健康生活支援論（2 年次**前期**必修科目）」でのレポート課題（子どもの発育発達、遊び）でコラボカフェの活用を学生に呼び掛け(2015 年～)、
③小児ヘルスアセスメント（大学院前期課程　後期必修）でのフィジカルアセスメント（問診）の演習（2015 年～)、
④スタートアップセミナー（1 年次前期必修科目）で、コラボカフェを利用する子どもと保護者とのかかわりをレポート課題に課す(2018 年のみ)
⑤大学院助産実践コースの非常勤講師がコラボカフェイベント（ベビーマッサージ）時の学生によるサポート(2018 年～)等である。

一方、2018 年度までに教員や大学院生によるコラボカフェ事業を活用した研究成果の公表はない。

本学における地域貢献事業としてのコラボカフェの課題：

１）大学の地域貢献の在り方としての評価

コラボカフェ開催から 7 年を経過し、乳児や保護者等利用者の認知度は定着している。過去 5 年間の調査結果より、コラボカフェ利用頻度は「不定期」約 6 割が最も多く、2018

年度の来所回数は、年 10 回未満が 414 名（86.1%）であることから、本学以外の子育て広場を併用利用している可能性も高い。コラボカフェへの期待は、「無料であること」「予約不要で気軽に利用できる」等が 8 割以上の回答であり、一方、学生や看護教員との交流への期待の割合は 1 割に満たない。

神戸学院大学では学部生による実習授業（道城ら，2015）、神戸親和女子大学では子育て支援プログラム（森本ら，2013）が報告されていた。これらの大学では、心理学部や発達教育学部の授業で子育て支援事業を活用している。

よって、本事業の目的①，②、③の達成率は低いと言える。

大学における地域貢献は地域住民と大学関係者との相互事業であるが，教員や大学院生によるコラボカフェを活用した研究成果発表はなく、コラボカフェ事業は当大学が地域へ向けた一方向的な活動となっている。大学の地域貢献活動は、教育・研究の実績を活かしながら活動を行い、その活動を再度教育や・研究に還元させる好循環サイクルが望ましいが、本事業はそこからやや逸脱している状況である。

２）コラボカフェ事業の安全管理について

コラボカフェの平均利用者数は年々増加している。特に、保育士企画「ふれあい遊び」の人気は高く、30 組前後の保護者と子どもが集まる。

コラボカフェの面積は、約 70m^2 であるが、労働安全衛生法における事務所衛生規則で定める「気積」は、10 ㎥/人以上とされている。部屋の高さを 2.5m とすると（70×2.5＝175 ㎥）乳幼児と母親が 15~16 組が望ましい。年々利用者が増加している現状を鑑みると、子どもの安全や感染管理等の観点から、利用人数を 10~15 組程度に制限する等の対策が今後必要と考える。安全対策に関しては、一般の保育園では、毎月 1 回、防災防犯訓練計画を作成し、ホームページなどで公開されているが、コラボカフェ独自の計画書はない。また非常時（地震・火災・不審者等）への対応、避難経路や電源の始末、保護者への誘導などの危機管理は、保育士の判断に委ねられている。事務局のある研究棟から離れた場所にあるため、非常時の初期対応は、十分とは言えない。

３）カリキュラムポリシーの観点から、人材育成としての機能を果たしているのか

本学の６つのカリキュラムポリシーのうち、コラボカフェ事業は⑤（前略）地域住民の生活や健康問題に関するニーズをとらえる力、主体的に地域活動に参加する姿勢を育てる、に相当することを開設当初は期待していたと考えられる。学生は授業・演習・実習等の単位取得の準備・レポート提出のため，本事業に参加する余裕はない。過去 5 年間の学生のコラボカフェ活用状況では、1 か月あたり 1.8~7.8 人であったことから、学生が積極的に本事業を活用している状況とはいえない。

今後、人材育成としての機能を果たすためには、学部生、大学院生の授業に、意図的に

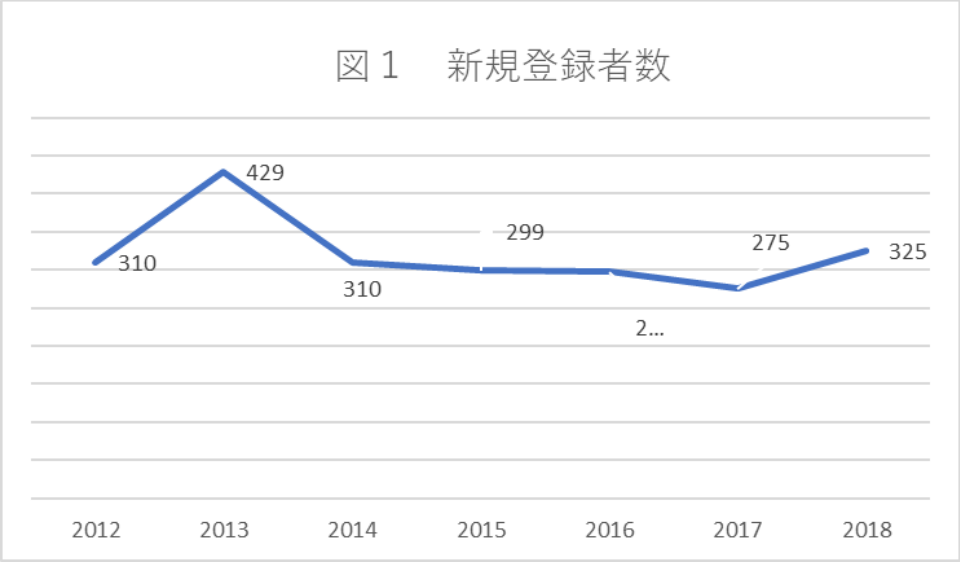
活用できる具体的な方策を、大学全体で共有する必要があると考える。

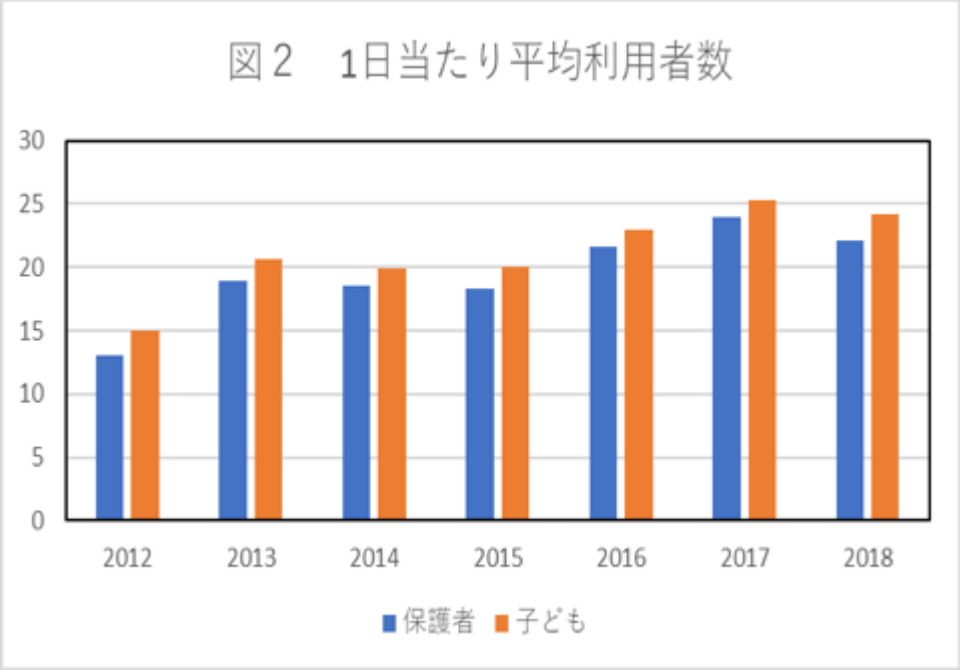
＜以下資料編＞

コラボカフェ事業の実際

１）過去 7 年間のコラボカフェ利用者の推移

2012~2018 年の利用者個票（登録数、１日平均利用者、学生）による概要である。コラボカフェを開設後 7 年間の新規利用登録者数はおおむね 300 組前後、一日当たりの平均利用者数は年々増加しており 20~25 組の親子が利用している（図 1,2）





２）過去５年間のコラボカフェに関わった学生数の推移

過去 5 年間の本学学生のコラボカフェの参加状況である（図 3）。月平均に換算すると、1 か月あたり 1.8~7.8 人であった。2018 年度に限ってみれば学生の活動状況（図４）は、前期授業期間に集中していた。この理由として、学部生が 1 年次の必修科目（スタートアップセミナー）で、コラボカフェを利用している子どもと保護者を対象としたレポート課題を課せられていた。

月平均（人）

5.1	7.8	1.8	2.6	5.8

3）利用者アンケート調査

コラボカフェ運営会では、過去 1 年間のコラボカフェ利用者を対象に、2013~2018 年度にアンケート調査（配布数 385～534 通）を実施した。アンケート回収割合は、25.9~37.1%(平均 31.2%)、有効回答率は 97.4%であった。調査内容は、利用頻度、コラボカフェへの期待、自由記載等である。

コラボカフェの利用頻度については、全体の利用者のうち、6 割が不定期、次いで月 1~3 回（1 割）の利用という回答を得た（図 5）。

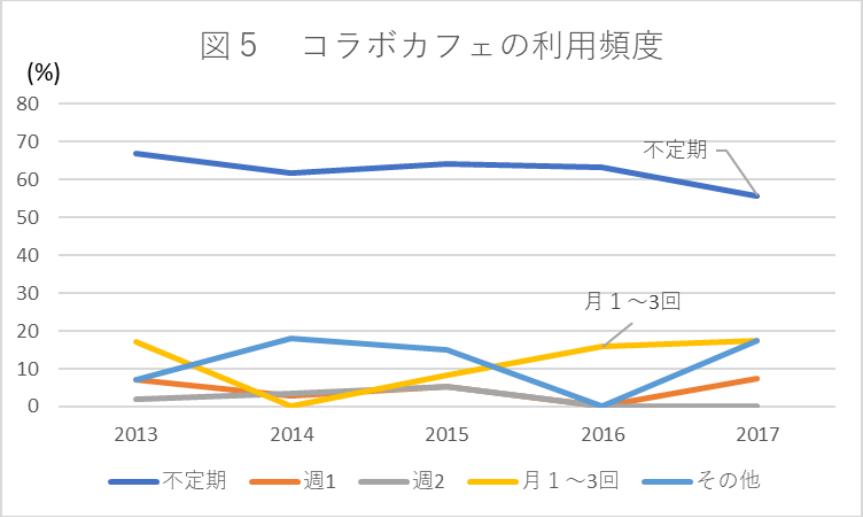
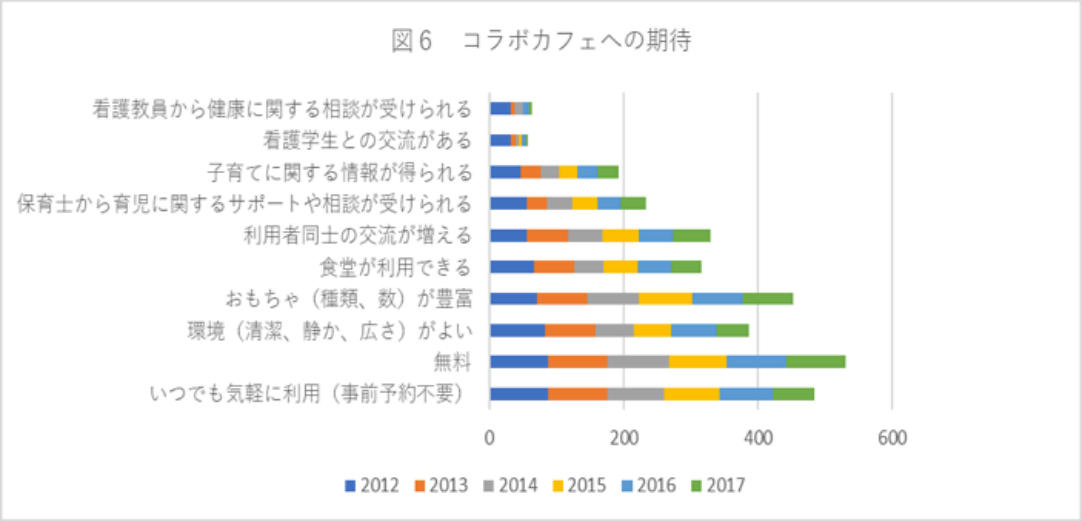


図 6 は、5 年間のアンケート結果回答者総数(716 名)の、コラボカフェへの期待を示す。回答者の意見として、無料（9 割前後）で気軽に利用できる（8 割前後）、おもちゃの豊富さ（7 割）、利用者同士の交流ができる（5 割）、保育士に相談できる（4 割弱）ことが示された。学生との交流や看護教員による相談への期待は 1 割未満であった。



4）2018 年度イベント一覧

日程	テーマ	担当	参加者
5 月 10 日（木）	母乳と卒乳のお話し会	教員、事務	22 組
5 月 24 日（木）	子どもの体調が悪い時のホームケア	教員、事務	20 組
5 月 26 日（土）	コラボカフェ in あざみ祭	教員、保育士、事務	30 組前後
6 月 16 日（土）	親子で体を使って遊ぼう（乳児編）	神戸 YMCA 西神戸ブランチ（5 名）、教員、事務、学部 3 名	35 組
7 月 2 日（月）	七夕まつり	保育士、事務	16 組
8 月 2 日（木）	子どものこころの発達	外部講師、教員、事務 2 名	20 組申し込み
9 月 12 日（水）	子どもの靴選び	外部講師、教員、事務、保育士	19 組
10 月 20 日（土）	親子で体を使って遊ぼう（幼児編）	神戸 YMCA 西神戸ブランチ（5 名）、教員、事務、学部 4 年生 4 名	27 組
12 月 10 日（月）	クリスマス会	保育士、教員（サンタクロース）	24 組
12 月 17 日（月）／1 月 28 日（月）	ペアレンティング	外部講師、保育士、教員、大学院生 2 名	20 組／16 組
2 月 12 日（火）	ベビーマッサージ	外部講師、教員、保育士、事務	10 組
2 月 27 日（水）	ひなまつり	保育士	24 組

毎週木曜日　11 時～　ふれあい遊び(保育士)

7 月 21 日～8 月 18 日　毎週木曜日 11 時～　水遊び(保育士)

文献

神戸市子ども家庭局（2017）神戸市大学と連携した地域子育て支援拠点づくり，http://www.city.kobe.lg.jp/child/grow/support/daigaku.html

道城裕貴,清水寛之,小石寛文,前田志壽代,山上榮子(2015)神戸市「地域子育て支援拠点づくり」事業にもとづく 神戸学院大学「子育てサロン『まなびー』」の基盤整備,教育開発センタージャーナル，6,77-89. https://www.kobegakuin.ac.jp/files/facility/org/journal/edc_journal/edc_journal-06_09.pdf

道城裕貴,清水寛之,山上榮子,前田志壽代(2016). 神戸学院大学「子育てサロン『まなびー』」の現状と課題，教育開発センター ジャーナル，7,45-51. https://www.kobegakuin.ac.jp/files/facility/org/journal/edc_journal/edc_journal-07_07.pdf

神戸大学大学院人間発達環境学研究科　ヒューマン・コミュニティ創成研究センター・サテライト施設のびやかスペースあーち，http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/arch-prep.html

森本玲子，石岡由紀，山口香織.（2013）子育て支援の現状と課題Ⅲ ： 神戸親和女子大学子育て支援センターの 5 年間の実践から，神戸親和女子大学児童教育学研究，32，145-156.

大林陽子，岡田由香，緒方京，神谷摂子，志村千鶴子，佐久間清美，金尾洋治，高橋弘子（2011）大学を拠点とした子育て支援事業の活動報告と評価，愛知県立大学看護学部紀要，17，33-39. info:doi/10.15088/00001433

プレパパ・プレママセミナーの５年間活動実績

助産診断技術学演習の授業の一環で、セミナーの企画から運営まで学生が主体となって実施している。セミナーの目的は、対象となる地域住民(妊婦とそのパートナー)に妊娠期から子育て期を見越したセルフケア獲得への意識を高められるような、集団指導技術の実践的技術を助産学生が習得することである。

●2014 年（平成 26 年度）

【実績】

平成 26 年 9 月 27 日と、平成 27 年 1 月 24 日の 2 日間、それぞれ午前・午後 1 回ずつ、計 4 回のセミナーを西区在住の妊娠 18～36 週の妊婦とそのパートナー57 組を対象とし、開催した。内容は、妊娠中の過ごし方の話、お産の経過や過ごし方の話と母乳育児の話、沐浴体験、妊娠中の歯の話、仲間づくりであった。

【成果】

学生はそれぞれが役割分担をしながらセミナーを企画、準備することを学び、グループダイナミクスを用い集団指導技術を向上させることができた。また、地域住民は、妊娠期の女性のみならず、パートナーである男性の育児への協働意識を高められたり、参加者も交流し仲間づくりができたり、演習にも積極的に参加でき育児をイメージできたりしていた。学生自身が作成した参加者アンケートでも、参加者の満足度は高かった。「出産の劇を見て感動した。みんなに協力してもらうことが大切だと感じた。」「親になる自覚が深まった。」などの声があった。

●2015 年（平成 27 年度）

【実績】

平成 27 年 9 月 19 日と、平成 28 年 1 月 23 日の 2 日間、午後 1 回ずつ、計 2 回のセミナーを西区在住の妊娠 20～36 週の妊婦とそのパートナー26 組を対象とし、開催した。内容は、妊娠中の過ごし方の話(身体を温める話など)、お産の経過や過ごし方の話(劇)、お産のスライドショー、沐浴体験、仲間作りであった。

【成果】

参加者のアンケート結果より、自由記載では「普段から手足が 冷たい方なので、いただいたホットパックや食事を取り入れて、ぽかぽかな体を目指したいと思 います」「沐浴体験ができたことで、出産後の育児にも安心して取り 組むことが出来ると思います」などの声があり、満足度は高かった。学生は、参加者に自分たちの思いが伝わった という手応えは感じていたが、事前のシミュレーションを十分に行っていれば、より自分たちの メッセージが伝えられたのではないかと感じていた。

●2016 年（平成 28 年度）

【実績】

大学院助産学実践コースに移行して初のプレパパ・プレママセミナーとなった。助産学実践コースの学生 8 名が実施した。平成 29 年 2 月 11 日に午前、午後 1 回ずつ、計 2 回のセミナーを西区在住の妊娠 20～36 週の妊婦とそのパートナー9 組を対象とし、開催した。内容は、妊娠期から育児期にかけてのつながりの話、より健康に過ごすための身体を温める話、お産の経過の話、 沐浴体験、仲間作り、夫の妊婦体験であった。

【成果】

地域住民は、妊娠期の女性のみならず、パートナーである男性の育児への協働意識を高められたり、参加者も交流し仲間作りできたり、体験にも積極的に参加でき育児をイメージできていたりしていた。参加者アンケートより「赤ちゃん人形を抱っこすることで、もうすぐ会えるわが子を愛おしく感じ、今の生活を改めて見直そうと思いました。」「お産に向けて身体を温めたり、赤ちゃんの生活の準備を始めたりしていきたい。」「妊娠中の同じ重さと同じ服を着れたことで妻の大変さを感じれました。」などの声があった。学生は、参加者に自分たちの思いが伝わったという手応えは感じていたが、セミナーを通して参加者が心地よく過ごすための環境面・運営面においての配慮が不十分であったことから、その視点の強化をすべきであると感じていた。

●2017 年（平成 29 年度）

【実績】

大学院助産学実践コースの助産診断技術学Ⅰの授業の一環で、セミナーの企画から運営まで大学単独で実施している。平成 29 年 8 月 26 日には、大学院 2 年生が、平成 30 年 2 月 11 日には、大学院 1 年生が中心となり、各日 2 回ずつ計 4 回のセミナーを西区在住の妊婦とそのパートナー計 18 組を対象に開催した。 平成 29 年 8 月 26 日には、「めぐり」を、平成 30 年 2 月 11 日には、「つながり～今私たちにできること～」をテーマとし、妊娠期から育児期にかけてのつながりの話、より健康に過ごすための身体を温める話、お産の経過の話、沐浴体験、仲間作り、夫の妊婦体験を行った。

【成果】

妊婦は、あずきパックを用いて身体を温める実感をし、健康的にすごすために自身ができることを考えたり、自身のお産もイメージできたりしていた。パートナーにおいても、育児への協働意識を高められ、体験にも積極的に参加でき育児をイメージできていた。学生自身が作成した参加者アンケートでも、参加者の満足度は高かった。自由記載で は「パートナーと協力しあいながら出産・子育てをしていこうと強く感じた」「今の自分の生活が赤ちゃんの成長につながると思えた」「今後につながるよい経験となった」などの声があった。学生はそれぞれが役割分担をしながらセミナーを企画、準備することを学び、グループ ダイナミクスを用い集団指導技術を向上させることができた。

●2018 年（平成 30 年度）

【実績】

平成 30 年 8 月 25 日には、大学院 2 年生が、平成 31 年 2 月 10 日には、大学院 1 年生が中心となり、各日 2 回ずつ計 4 回のセミナーを神戸市在住の妊婦とそのパートナー計 18 組を対象に開催した。なお、今年度から対象地域を西区から神戸市全域へと拡大した。平成 30 年 8 月 25 日には、「わたしのお産」を、平成 30 年 2 月 10 日には、「マタニティライフ～今、私にできること～」をテーマとし、妊娠期の体の変化と過ごし方の話、分娩期の体の変化と過ごし方の話、沐浴体験、夫の妊婦体験を行った。

【成果】

妊娠期から出産、産後 の身体のつながりが伝わるように血液循環動態などの生理的変化や身体を温めることの大切さを説明した。また身体を温めるために参加者が生活に取り入れやすい方法をグループワークで話し合った。お産については、分娩の始まりから進み方の説明を寸劇や紙芝居を用いながら行い、お産のイメージを促した。またその中で呼吸法や産痛緩和のためのマッ サージを実践した。その後沐浴体験の前後に、産後の女性の身体の回復と生活の時間が変化することを伝え、産後は休息やサポートが大切であることを伝えた。参加者からは、「実践的なことを体験させてもらい、お産やその後のイメージがとても沸いた」「妊娠生活、出 産を二人で楽しく頑張っていこうと思えるセミナーだった」等、概ね満足度は高かった。 学生は、参加者に問いかけや体験を取り入れながら説明を行ったことで参加者と共にセミ ナーを進行できたと感じていたが、より分かりやすく伝える方法を強化すべきであると感じていた。

＜総括：5 年間の実績から見た今後の方向性＞

教育上の効果として、学生はそれぞれが役割分担をしながらセミナーを企画、準備することを学び、グループ ダイナミクスを用い集団指導技術を向上させることができていた。本セミナーは、8 月が 2 年生、2 月は 1 年生が主体となって実施している。1 年生、2 年生ともお互いのセミナーの事前練習に参加することで、意見を出し合い内容をブラッシュアップすることができ、よい相互作用が見られた。今後も、体験型を取り入れたプログラムを継続しつつ、すべての参加者の目標が達成できるよう に、その内容、方法、プログラム全体の構成まで再考する必要がある。

妊娠期の身体の変化の話

バランスの良い食材のグループワーク

沐浴体験

竹の台ふれあいまつり、竹の台総合新聞の５年間活動実績

竹の台ふれあいまつりは、「竹の台地域委員会」が主催で実施されており、平成 18 年から本学のブースも設けて参加している。

●2014 年（平成 26 年度）
【実績】
日時：平成 26 年 10 月 12 日
場所：竹の台小学校
参加者：ふれあい祭りに参加されている地域住民の方（約 100 名）
内容：助産学専攻科学生 11 名と学部 3 年生 1 名がボランティアとして参加した。内容は「赤ちゃん抱っこ体験」と「アロマハンドマッサージ」を実施した。アロマハンドマッサージは、103 名の地域住民に実施した。学生は自然と様々な世代の地域住民とコミュニケーションをとりながら、ハンドマッサージの実施させていただいた。この経験が後期の助産学実習にも活かされ、学生は実習においてハンドマッサージを助産ケアの一つとして取

り入れていた。

●2015 年（平成 27 年度）
【実績】
日時：平成 27 年 10 月 11 日
場所：竹の台小学校
参加者：ふれあい祭りに参加されている地域住民の方（約 100 名）
内容：助産学専攻科学生 9 名と学部 3 年生 2 名がボランティアとして参加した。内容は「赤ちゃん抱っこ体験」と「アロマハンドマッサージ」を実施した。アロマハンドマッサージは、93 名の地域住民に実施した。「赤ちゃん人形抱っこ体験」は幼児から高齢の方まで様々な世代に体験していただいた。様々な世代に合わせて赤ちゃんの抱き方を説明する経験ができた。地域住民の方からは「かわいい」「こんな大きさだっけ？なつかしいわ」「今度孫が生まれるけどこんな感じなんだね」という感想をいただいた。出産体験の貴重な話をしてくださる方もいて、学生自身も命の大切さについて改めて考える機会となった。

●2016 年（平成 28 年度）
【実績】
日時：平成 28 年 10 月 9 日
場所：竹の台小学校
参加者：ふれあい祭りに参加されている地域住民の方（約 100 名）
内容：神戸市看護大学大学院看護学研究科博士前期課程ウィメンズヘルス看護・助産学 専攻の院生 9 名とウィメンズヘルス看護学分野の教員 4 名がボランティアとして参加し、「赤ちゃん抱っこ体験」と「アロマハンドマッサージ」と「学生のよるオレンジリ ボン運動」を実施した。学生によるオレンジリボン運動は、若年者に向けた子ども虐待予防の啓発が必要との提言があり、厚生労働省から関係団体に呼びかけ発足した虐待予防の啓発運動であり、平成 25 年度の竹の台ふれあいまつりにおいても実施し、今回 2 度目の活動となった。オレンジリボンを学生が作成し、アロマハンドマッサージを体験した方にオレンジリボン運動の趣旨を説明し、オレンジリボンをつけてもらうように手渡した。赤ちゃん人形抱っこ体験では、幼児から高齢の方まで様々な年代に体験していただき、住民からの感想では「かわいいね。懐かしいね」、「こんなに小さかったかな～」というお声をいただいた。アロマハンドマッサージは毎年好評で、64 名の方に実施をした。

●2017 年（平成 29 年度）
【実績】
日時：平成 29 年 10 月 8 日
場所：竹の台小学校

参加者：ふれあい祭りに参加されている地域住民の方（約 100 名）
内容：大学院博士前期課程ウィメンズヘルス看護・助産学専攻の 8 名、学部生 4 名、ウィメンズヘルス看護学分野の教員 5 名がボランティアとして参加した。内容は「赤ちゃん人形抱っこ体験」 、「アロマハンドマッサージ」と「学生によるオレンジリボン運動」を実施した。赤ちゃん抱っこ体験では、幼児から高齢の方々まで多くの年代の方が新生児人形を抱っこし、それぞれに思い思いの言葉を発しておられた。アロマハンドマッサージは毎年好評で、マッサージに来た方も「毎年楽しみで」「このために来た」など楽しみにしてくださっている様子が見て取れた。学生によるオレンジリボン運動では、事前に学生が作成していたオレンジリボンを、赤ちゃん人形抱っこ体験やアロマハンドマッサージを受けに来てくださった方々に、オレンジリボン運動の趣旨や神戸市の児童虐待の現状を説明しながら手渡した。また学生および教員もオレンジリボンをつけながら活動し、児童虐待について住民の方々に知ってもらえる機会となるよう声掛けを行った。

●2018 年（平成 30 年度）
【実績】
日時：10 月 7 日（土）
場所：竹の台小学校
参加者：ふれあい祭りに参加されている地域住民の方（約 100 名）
内容：神戸市看護大学大学院看護学研究科博士前期課程ウィメンズヘルス看護・助産学専攻の院生 13 名、ウィメンズヘルス看護学分野の教員 4 名がボランティアとして参加した。内容は「赤ちゃん人形抱っこ体験」「アロマハンドマッサージ」と「学生によるオレンジリボン運動」を実施した。アロマハンドマッサージは今年も 90 人前後の方に実施することができた。参加者の中には、昨年マッサージを受けてよかったため、今年度は友人を連れてきてくださった方もいらっしゃった。赤ちゃん抱っこ体験では、家族連れや、小学校低学年の子どもから恒例の方々が抱っこされ、それぞれに思い思いの言葉を発しておられた。

竹の台総合新聞

西区竹の台地域員会広報部が発行している「竹の台総合新聞」へ、神戸市看護大学大学院生による健康コラムを、平成 30 年 3 月配布の 64 号から 70 号まで連載した。きっかけは、本学助産学専攻科・助産学実践コース学生と学部学生が中心となって「竹の台ふれあいまつり」に 11 年前より毎年参加し、アロマハンドマッサージや赤ちゃん人形抱っこ体験、オレンジリボン運動などを実施していることのつながりからである。今年度、竹の台地域委員会から「今後は（本学と）もう少し頻度の高い継続的な交流をしたく、その足掛かりとして年 5 回“竹の台総合新聞”に、健康に関するコラムを書いていただけないか」との 強い要望があり、本学としても、地域に根差した大学であり、地域住民に本学の研究を

知ってもらう良い機会であると考え、臨床経験豊富な大学院生が自らの研究に関することや関心のある健康に関連したトピックについて書くことになった。新聞は竹の台地区全戸に配布されている。各号のテーマと執筆大学院生は以下のとおりである。（67 号は祭り号のため掲載なし）

平成 29 年度

64 号 自分の体を知ろう、気に掛けよう！（ウィメンズヘルス看護・助産学専攻 野島奈月）

平成 30 年度

65 号 快適な産後を過ごすために（ウィメンズヘルス看護・助産学専攻 松村綾乃）

66 号 「かかりつけ医」をもってください（看護キャリア開発学専攻 加藤まなみ）

68 号 手洗と感染症（看護管理学分野 藤岡直昭）

69 号 サルコペニアをご存知ですか？（慢性病看護学専攻 桑原京子）

70 号 がん検診に行こう（がん看護学専攻 古田愛美、木村実咲、内村千里）

＜総括：5 年間の実績から見た今後の方向性＞

教育上の効果として、学生はアロマハンドマッサージや赤ちゃん抱っこ体験において、幅広い年代の対象者と コミュニケーションをとりながら、相手の反応に応じて声掛けやマッサージを工夫し、コミュニケーション能力の向上やマッサージのコツの習得する機会となっていた。また学生は継続することでの地域の方とのつながりが増えていくのを実感していた。

今後の方向性として、学生の竹の台ふれあいまつりへの参加は、地域住民と触れ合う機会、生活の場を理解する機会となっている。また母子に関わる専門職としてのボランティア活動について考える機会となるため、今後も継続して実施していく必要がある。助産学実践コースの大学院生だけでなく、学部学生のボランティア参加を増やし、地域住民の方とつながりが持てる機会を増やすことも課題としたい。

命の感動体験の４年間活動実績

本事業は平成 15 年度から長坂地区より開始され、小学校 5・6 年生の児童と乳幼児およびその保護者とのふれあいを通して、命の大切さを認識し育児性を育むことを目的とする西区役所と各地区民生委員児童委員協議会(以下、民児協)、小学校および本学の協働事業である。当日運営は、西区役所こども保健係保健師、各地区の民児協、子育てサークル関係者、小学校教諭、本学教員、雇用助産師等がおこなっている。

●2014 年（平成 26 年度）

【実績】

初開催の小学校および民児協からの希望もしくは西区役所と本学が必要であると判断し

た小学校にのみ事前の打ち合わせに出席し、当日出務をした。今年度の事業開催は、長坂・桜が丘・小寺・月が丘・櫨谷・玉津第一・神出・平野・ 井吹西・枝吉・高津橋・東町・有瀬・押部谷・高和・北山の 16 校で開催され、昨年度より 2 校増加した。そのうち、今年度初開催となった小学校は高知・北山の計 2 校であった。本学教員の出務は長坂・小寺・東町・高和・北山の計 5 校で、出務延回数は計 7 回である。

【内容】

小学校や民児協との円滑な連携・協働のもとに実施され、おおよそ児童 2 人と乳幼児一人がペアとなり、しっかり関りを持つことができていた。民事協スタッフも地域イベントに慣れた様子で、児童と親子の関りを深めるような促しがされていた。初めは緊張ぎみだった小学生も、赤ちゃんと触れ合うにつれて口々に「可愛い」「あったかい」等の発言が聞かれ、命の温かみ、大切さを感じている様子であった。また、保護者の子育ての話に対し、児童たちは自分自身が赤ちゃんだった頃の姿を投影させながら興味深く聞いていた。参加された保護者は、小学校 5・6 年生の児童とふれあうことにより、自分の子どもが小学生になった姿をイメージすることができ、また将来子どもが入学すると思われる小学校の雰囲気を感じながら過ごされていた。本事業の開催を通して、民児協や小学校および参加された保護者が、地域内の相互のつながりを深める機会になっている様子であった。保護者の参加動機をみると、参加経験のある保護者から「良かった」という意見を口コミで聞いて参加した、とい う方も多くおられ、本事業が地域の中で肯定的な評価を得ていること、地域に浸透している様子 がうかがえた。また、参加経験のある保護者の方は、なかなか乳幼児との距離を縮められない児童に対して触れ合いを促す声掛けをする等、児童の状況に応じて自然に触れ合いを誘導する姿が見られた。

●2015 年（平成 27 年度）

【実績】

教員は、民児協からの希望もしくは西区役所と本学が必要であると判断した小学校にのみ事前の打ち合わせに出席し、当日出務をした。今年度の事業開催は、前年度と同様に長坂・桜が丘・小寺・月が丘・櫨谷・玉津第一・神出・平野・ 井吹西・枝吉・高津橋・東町・有瀬・押部谷・高和・北山の 16 校で開催され、新規開催校はなかった。本学教員の出務は長坂・小寺・東町の計 3 校で、出務延回数は計 5 回である。

●2016 年（平成 28 年度）

【実績】

昨年度に引き続き、初開催の小学校および民児協からの希望もしくは西区役所と本学が必要であると判断した小学校に事前の打ち合わせおよび当日に出務した。東町小学校、小寺小学校、長坂小学校の計 3 校に出務した。また、西区役所と本学の役割、事業の今後の方向性についての検討会議を 2 回行った（平成 28 年 5 月、平成 28 年 12 月）。検討会議では、各関係機関で本事業の方向性や目的について再検討を行う必要性があることや本学

の役割の見直しを行う必要があること等についての話し合いを行った。西区役所が命の感動体験事業実務者ワーキングを開催し、本学はそれに出務 した（平成 29 年 3 月）。事業開始から 10 年以上が経過する中で、事業の目的や必要性について改めて共有するとともに、効果的に継続していくことができるよう、各関係機関と意見交換を行う機会として、本ワーキングの開催が行われたという経緯がある。参加団体は、北山小学校、高津橋小学校、櫨谷小学校、井吹西地区民生児童委員協議会、玉津西地区民生児童委員協議会、長坂地区民生児童委員協議会、YMCA 保育園、あさひ児童館、月が丘子育てパンダ、西区総務部まちづくり課、西区こども家庭支援室、本 学であった。本学は、本ワーキング内で、これまでに行政と共同研究をしていきた研究成果（平成 16 年度、平成 23 年度、平成 25 年度に実施）の報告を行った。

●2017 年（平成 29 年度）

【実績】

事業開始から 10 年以上が経過する中で、事業の目的や必要性について改めて共有するとともに、効果的に継続していくことができるよう、各関係機関と意見交換を行う機会として、平成 28 年度に「命の感動体験事業実務者ワーキング」が開催され、本学も参加した。 今年度は、「平成 29 年度命の感動体験事業事業検討会」（以下、事業検討会）が平成 30 年 2 月 8 日に西区役所で開催された。当日の参加団体は、小寺小学校、有瀬小学校、高津 橋小学校、長坂地区民生児童委員協議会、桜が丘地区民生児童委員協議会、押部谷西地区民生児童委員協議会、神出児童館、玉津婦人会、根っ子の会、西区総務部まちづくり課、西区社会福祉協議会、西区こども家庭支援課、本学であった。本事業検討会では、1．次世代親づくり支援に関する実施状況 2．命の感動体験事業昨年度ワーキング報告 3．意見交換（昨年度ワーキングで課題として出た意見に対して、解決策などについて の意見交換）についての報告及び検討が行われた。

＜総括：4 年間の実績から見た今後の方向性＞

命の感動体験事業が全市的に開催され始めている中、西区においても事業導入後 10 年以上が経過する小学校も存在し、本事業が地域に定着している現状がある。事業開始時に参加した乳幼児が成長し今後は児童として赤ちゃんとその保護者とふれあうなどの状況もある。また、保護者においても、第 1 子で参加し、次子でも引き続き参加がある保護者や、複数校で参加がある方等、保護者自身もエンパワメントされている様子がある。

このように、実施校と地域が経験を積み主体的に事業を行う力量を持ちつつある中で、各関係機関が今後どのような役割を担っていくべきかを検討していく必要がある。事業開始当時から実施してきた学校は地域の力で実施する力を向上させつつあり、各々小学校により状況が異なり、必要とする支援も異なっていると考える。引き続き、事業検討会等を通して、本事業のあり方及びそれに伴う各関係機関の役割を検討していく必要がある。

命の出前講座の５年間活動実績

命の出前講座は、神戸市西区内の小学 4 年生または 5 年生を対象に、平成 17 年度より助産師教員が主体となって開始した。主な担当者を助産師教員から学生の企画運営へと移行し、本学助産学専攻科の学生が主体となって実施していたが、平成 28 年度からは助産学専攻科の廃止に伴い、本学大学院助産学実践コースの院生が主体となり実施している。現在、大学院科目「思春期健康教育論」を選択履修した学生が、思春期にある地域住民に対して健康教育を実施する健康支援活動である。

【実績】

●2014 年（平成 26 年度）

小寺小学校

・実施日：平成 26 年 10 月 20 日（月）　対象者：5 年生 75 名

・実施日：平成 25 年 10 月 23 日（水）　対象者：4 年生 28 名

竹の台小学校

・実施日：平成 26 年 1 月 20 日（月）　対象者 4 年生 63 名

●2015 年（平成 27 年度）

小寺小学校

・実施日：平成 27 年 10 月 16 日(金)　対象者：5 年生 58 名

・実施日：平成 27 年 10 月 22 日(木)　対象者：4 年生 60 名

竹の台小学校

・実施日：平成 28 年 1 月 14 日(木)　対象者：4 年生 63 名

●2016 年（平成 28 年度）

小寺小学校

・実施日：平成 28 年 10 月 14 日(金)　対象者：5 年生 62 名

・実施日：平成 28 年 10 月 19 日(木)　対象者：4 年生 69 名

竹の台小学校

・実施日：平成 29 年 1 月 13 日(金)　対象者：4 年生 55 名

●2017 年（平成 29 年度）

小寺小学校

・実施日：平成 29 年 10 月 24 日（火）　対象者：5 年生 71 名

・実施日：平成 29 年 10 月 27 日（金）　対象者：4 年生 65 名

●2018 年（平成 30 年度）

小寺小学校

・実施日：平成 30 年 10 月 19 日（金）　対象者：5 年生 65 名

・実施日：平成 30 年 10 月 26 日（金）　対象者：4 年生 70 名

【内容】

二次性徴を経験する／している自分や他者のからだやこころを理解し、人として変化する自分や他の人を思いやる(想像する)ことを考える機会にすることを授業目標とし実施した。

主には教員が第二次性徴に関するゲームを取り入れた参加型の授業を行い、学生は小グループを各自受け持ち、小学生からの質問に答えた。小グループで丁寧に質問に答えたり話し合う時間を中心に授業をすることで、小学生らは自分のグループを担当した助産師学生に対して手紙を書く形で感想を寄せてくれた。第二次性徴を迎える自分たちの身体の変化を楽しく知ることができたとする感想が多かった。児童の感想では、第二次性徴を迎える自分たちの身体の変化を楽しく知ることができたことや、男女の成長の違いや共通点の発見や気づきに関する内容がみられた。小学生自身が関心を持って意見を言い合うことで、能動的な学習体験となっており、学習項目に対して楽しく知ることができたと述べる感想も多かった。

【成果】

助産師を目指す学生にとって、小学 4 年生と 5 年生に思春期健康教育を行うことで、思春期にある人の発達段階を目の当たりにし、対象理解を深めることにつながった。また 健康教育のスキルやコミュニケーションスキルも、3 回の経験を経ることで、回を重ねるごとに向上させることができた。また学生は、企画・打ち合わせ・準備・実施と一連の過程を行う中で、地域の小学校の養護教諭との連携の実際を学ぶことができた。さらに、健康教育を通じて小学生に対して「出産」や命の誕生の素晴らしさを伝えることができるという実感を持てたことで、助産師が健康教育を行うことの意義を考えることができるようになった。看護学を学び、助産学を深める院生にとって、思春期にある人の発達段階を目の当たりにし、人間理解やセクシュアリティ観を深めることにつながった。

＜総括：5 年間の実績から見た今後の方向性＞

命の出前講座は、2018 年度で 13 年目となり、これまで工夫を重ねて取り組み、継続してきた。大学院教育と連携させながら「命の出前講座」を展開することで、学年連携が可能となったと考える。思春期にある児童を対象とした「命」について感じ考える出前講座は、対象となる小学校で根付いており、参加した小学生の感想からみてもニーズがある取り組みである。また助産師を目指す学生の教育にとっても、重要な機会となっているため、効果的に引き継いでいけるよう、検討し実践を続けることが重要である。

トライやる・ウィークの５年間活動実績

(1)概要

トライやる・ウィークは、兵庫県下の中学校２年生が地域を学びの場に、体験を通して、自ら学び、考え、体験する教育の一環として実施されている。生徒一人一人の興味・関心に応じて「職業体験」「農林水産体験」「文化芸術創作体験」「ボランティア・福祉体験」などの社会体験活動を５日間各事業所にて行われる。それによって、学校ではできない様々な活動に挑戦し、豊かな感性や創造性を高めたり、自分なりの生き方を見つけたりすることができるよう支援し、ともに生きることや感謝の心を育み、自立性を高めるなど「生きる力」を育成することが目的とされる。

(2)実績

平成 26 年度～平成 30 年度において、本学における 3 日間トライやるウィークの実施内容は、施設見学、図書館での業務補助、コラボカフェでの子どもの見守り補助などを行った。各年度の詳細日程は下記に示した。また教科において、授業見学、看護学演習参加、実験準備補助、本学全体を知る幅広い体験をした。

過去 5 年間のトライやる・ウィークに参加した生徒達の感想として、

「面白い実験、図書館のお手伝いや授業の見学をして、看護大学に興味を持ちました。もっと自分の将来について考えないといけないと思いました(平成 30 年度)。」

「図書館での職員体験、実験準備のお手伝いや赤ちゃんの触れ合いなど中学校ではできない貴重な体験だったです(平成 30 年度)。」

「学食を食べながらたくさんのお話しができてとても楽しかったです。いただいたお菓子もとてもおいしかったです(平成 30 年度)。」

「看護師には患者さんの心のケアだけでなく、いろいろやらなければならない仕事がたくさんあり、覚えなければことがたくさんあることを知りました(平成 29 年度)。」

「わたしは、看護師になるのにはどのような知識が必要かわからなったけれど、授業の見学させて頂いてとてもうれしく思います(平成 29 年度)。」

「人とすれ違ったら大きな声で挨拶する(平成 28 年度)。」

「看護という仕事に興味をもった(平成 28 年度)。」

「授業の見学や実験準備のお手伝いなど貴重な体験だった(平成 28 年度)。」

「全体的な活動を通じて社会人としての礼儀を学ぶことができた(平成 27 年度)。」

「授業や実験を受け、大学を知る良いきっかけになった(平成 27 年度)。」

「シュミレーター用人形や看護演習用ベッドに触れ、看護の知識をつけるための授業内容が知れて勉強になった(平成 27 年度)。」

「図書館のたくさんの資料・本の数に驚いた(平成 27 年度)。」

「訪問前は緊張していたが楽しくトライやる・ウィークを終えることができた(平成 27 年度)。」

「車いすいつもの目線が変わっただけで見え方が変わり、バリアフリーが大事だと思った(平成 26 年度)。」
「看護大学なので医療のことだけを学ぶと思っていましたが、社会のことも学ぶと知り驚きました(平成 26 年度)。」
「実験では白衣を着て中学校では使えない器具を使わせてもらい、色々な体験ができた(平成 26 年度)。」
「幼い子には怒ったり泣いたりする理由を一緒に考える事が大切だと思った
(平成 26 年度)。」
「大学では裏方の人がたくさんいるのだなと思いました(平成 26 年度)。」
　などが上げられた。
　過去 5 年間トライやるウィークの感想から、自分の夢を追い続けると 3 日間の体験を生徒たちは好感をもちつつ積極的に受け止めたようである。また、看護大学における教育・研究・組織運営・地域貢献の内容と看護大学設立の意義について少し理解できたものと思われる。このように、今回のトライやる・ウィークが、看護職を身近に感じ、生徒たちの将来について考える一助となれば幸いである。

●平成 26 年度

神戸市立太山寺中学校　女子生徒 2 名受け入れた。

トライやるウィーク日程

		時間	項目	内容	担当	H26年度
12月10日（水）	1限	9:00～10:30	ガイダンス	施設案内等	事務局 橋倉課長・阪上	
	2限	10:40～12:10			丹野先生	授業準備：（丹野先生）
	3限	13:10～14:40			樫田先生	授業：（社会福祉学　樫田先生）
		14:40～	まとめ	活動日誌作成	事務局 大寺	
12月11日（木）	1限	9:00～10:30			渡邊先生	授業：（人体構造論　渡邊先生）
	2限	10:40～12:10			コラボカフェ 保育士	コラボカフェ：（子どもの見守り補助）
	3限	13:10～14:40			事務局 阪上	作業：（整理　庶務係）、その他
		14:40～	まとめ	活動日誌作成	事務局 大寺	
12月12日（金）	1限	9:00～10:30			図書館 乾	図書館：（受付・資料整理　図書館）
	2限	10:40～12:10				
	3限	13:10～13:40	反省会		事務局 神澤係長	
		13:40～	まとめ	活動日誌作成	事務局　森 田局長	

●平成 27 年度

神戸市立太山寺中学校　女子生徒 2 名、神戸市立桃山台中学校女子生徒 2 名の生徒を本学に受け入れた。

トライやるウィーク日程

日時		項目	内容
11 月 10 日（火）	1 限	ガイダンス	概要説明・大学案内等
	2 限	コラボカフェ	子どもの見守り補助
	3 限	図書館	受付・資料整理
	14:40～	まとめ	活動日誌作成
11 月 11 日（水）	1 限	施設案内	施設案内（ミキサー室･統計台他）・事務作業・整理
	2 限	実験補助	生化学実験準備補助
	3 限	生物実験	アルコールの肝細胞に対する影響（顕微鏡観察）
	14:40～	まとめ	活動日誌作成
11 月 12 日（木）	1 限	事務作業補助	事務局総務係：書類整理他
	2 限	授業見学	人体機能論
	3 限	授業見学	周手術期看護論
	14:40～	まとめ	反省会・活動日誌作成

●平成 28 年度

神戸市立太山寺中学校　女子生徒 2 名、神戸市立桃山台中学校女子生徒 2 名を本学に受け入れた。

トライやるウィーク日程

		時間	項目		内容
11月9日（水）	1限	9:00～10:30	ガイダンス	概要説明 大学案内等	
	2限	10:40～11:45		実験室	マウス観察・生物実験室見学
	2限	11:50～12:10		実習室	授業：看護基礎技術学演習Ⅰ見学
	3限	13:10～14:40		図書館	図書館：受付・資料整理（図書館）
		14:40～	まとめ	活動日誌作成	
11月10日（木）	1限	9:00～10:30			施設案内・作業・整理
	2限	10:40～12:10		実験室	実験準備補助：生活と環境
	3限	13:10～14:40		実験室	細胞観察：生化学
		14:40～	まとめ	活動日誌作成	
11月11日（金）	1限	9:00～10:30		講義室	授業：周手術期看護論
	2限	10:40～12:10		コラボカフェ	子どもの見守り
	3限	13:10～14:00		コラボカフェ	子どもの見守り
		14:00～	まとめ	反省会 活動日誌作成	

●平成 29 年度

神戸市立太山寺中学校　女子生徒 2 名を本学に受け入れた。

トライやるウィーク日程

		時間	項目	内容	担当	
11月 8日（水）	1限	9:00～10:30	ガイダンス	概要説明 大学案内等	総務係長	
	2限	10:40～12:10	トライやる		丹野先生	実験補助:生活と環境 ＊看護技術演習風景見学（約15分）
	3限	13:10～14:40	トライやる		丹野先生	細胞観察 :生化学
		14:40～	まとめ	活動日誌作成	事務局	
11月 9日（木）	1限	9:00～10:30	トライやる		船木先生	授業 :周手術期看護論
	2限	10:40～12:10	トライやる		図書館	
	3限	13:10～14:40	トライやる	施設案内・作業・整理・清掃	事務局	
		14:40～	まとめ	活動日誌作成	事務局	
11月10日（金）	1限	9:00～10:00 10:00～10:30	トライやる		二木先生 コラボカフェ	授業 :薬理学
	2限	10:40～12:10	トライやる		コラボカフェ	
	3限	13:00～	まとめ	反省 活動日誌作成	総務課長	

●平成 30 年度

神戸市立太山寺中学校　女子生徒 2 名を本学に受け入れた。

トライやるウィーク日程

		時間	項目	内容	担当	
11月 7日（水）	1限	9:00～10:30	ガイダンス	概要説明 大学案内等	神澤課長	
	2限	10:40～11:10 11:10～12:10	トライやる	演習参加 実験準備	柴田しおり(教員) 丹野恵一（教員）	看護技術演習Ⅰ@体育館(30分) 生化学実験準備)@実験室Ⅱ(60分)
	3限	13:10～14:40	トライやる	実験参加	丹野恵一(教員)	生化学実験 :細胞観察@実験室Ⅱ(90分)
		14:40～	まとめ	活動日誌作成	事務局	
11月 8日（木）	1限	9:00～10:30	トライやる		図書館	
	2限	10:40～12:10	トライやる	実験補助	丹野恵一(教員)	実験補助 :生活と環境@実験室Ⅱ(90分)
	3限	13:10～14:40	トライやる	授業見学	渡邉定博(教員)	授業 :人体構造論@W21(90分)
		14:40～	まとめ	活動日誌作成	事務局	
11月 9日（金）	1限	9:00～10:00 10:00～10:30	トライやる		波田弥生(教員) コラボカフェ	授業 :保健医療行政福祉論@W13(60分)
	2限	10:40～12:10	トライやる		コラボカフェ	
	3限	13:00～	まとめ	反省会 活動日誌作成	伊藤課長	

看護専門職講座の５年間活動実績

本講座は看護職を対象とした公開講座で、看護職からニーズの高いテーマやおすすめの講義等からテーマを選び、年１回開催している。

●2014 年（平成 26 年度）

【テーマ】

「はじめよう　エンド・オブ・ライフケア」

講師：千葉大学大学院看護学研究科　エンド・オブ・ライフケア看護学、特任教授 長江弘子先生

【実績】

日時：平成 26 年 11 月 3 日（ 月 ）

場所：本学ホール

参加者： 183 名(看護職 60 名、 本学学生 97 名、教員 26 名)

講演内容：講演は、エンド・オブ・ライフケアの定義から実践への適用まで幅広い内容で、参加者はメモを取りながら熱心に聞いていた。

アンケート結果：参加者の 74%がよかったと回答し、「急性期病院でもエンド・オブ・ライフケアの考えをすすめていきたい。」「今日の講義を聞き、日ごろの実践の方向性が反れていないことが分かり、自信につながった。」などの自由記載がみられた。

●2015 年（平成 27 年度）

【テーマ】

「看護におけるスピリチュアルケア - スピリチュアルペインアセスメントシートの活用を中心に-」

講師：京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻教授 田村恵子先生

【実績】

日時：平成 27 年 9 月 12 日（ 土 ）

場所：本学ホール

参加者： 210 名(看護職 158 名、 本学学生 34 名、教員 18 名)

講演内容：事例を用いながらアセスメントの考え方を話され、 最後には理論に基づくアセスメントを導くツールであるスピリチュアルペインアセスメントシー トの活用方法を紹介されるなど、実践に適応しやすい内容であった。

アンケート結果：参加者の 85%が良かったと回答し、「スピリチャルペインを どのようにケアしていったらいいのか難しいと思っていたので、アセスメントする方法がわかってよかった」「臨床の場で活かしていきたい」などの自由記載が多数みられた。

●2016 年（平成 28 年度）

【テーマ】

「看護の癒し：患者や家族と向き合う」

講師：大阪府立大学急性期看護学分野教授・急性・重症患者看護専門看護師

北村愛子先生

【実績】

日時：平成 28 年 11 月 3 日（木祝）

場所：本学ホール

参加者：158 名（看護職 118 名、本学学生 23 名、教員 17 名）

講演内容：1.開かれた人間のシステムと看護支援、2.サバイバーとしての適応の支援、3.苦悩に満ちた状況を乗り越える支援、4.急性重症患者と家族への「看護の癒し」を支えるための課題という 4 つの視点から、急性重症患者と家族への「看護の癒し」の考え方が提示された。

アンケート結果:参加者の 82%が良かったと回答し、「看護の本質を考える機会になった」、「途中涙が出ました。患者のその人らしさを引き出すケアの実践に貢献できるよう努力したいと思いました」などの自由記載がみられた。

●2017 年度（平成 29 年度）

【テーマ】

「臨床経験を活かす新たなキャリア開発：CNE コース（看護教育学上級実践コース）の学びとその成果」

講師：聖路加国際大学看護学研究科教授　松谷美和子先生

【実績】

日時：平成 29 年 10 月 28 日（土）

場所：本学西館講義室

参加者：52 名（一般　15 名　神戸看護学会　6 名　本学教職員　23 名　本学学生 8 名）

講演内容：1.看護専門職の教育、2.教育と臨床の協働、3.CNE での学びとその成果という 3 つの視点から、臨床と教育の連携に関する考え方や実践が提示された。後半では、実際に聖路加国際病院で CNE として働かれている方 2 名による講演もあり、より実践に基づいた内容に参加者の多くが熱心に聞いていた。

アンケート結果：参加者全員が良かったと回答し、「今後看護して働く指針となった」、「興味のあるテーマであり、分かりやすい講演スライドでした」、「非常に刺激的な内容でした」などの自由記載がみられた。

●2018 年度（平成 30 年度）

【テーマ】

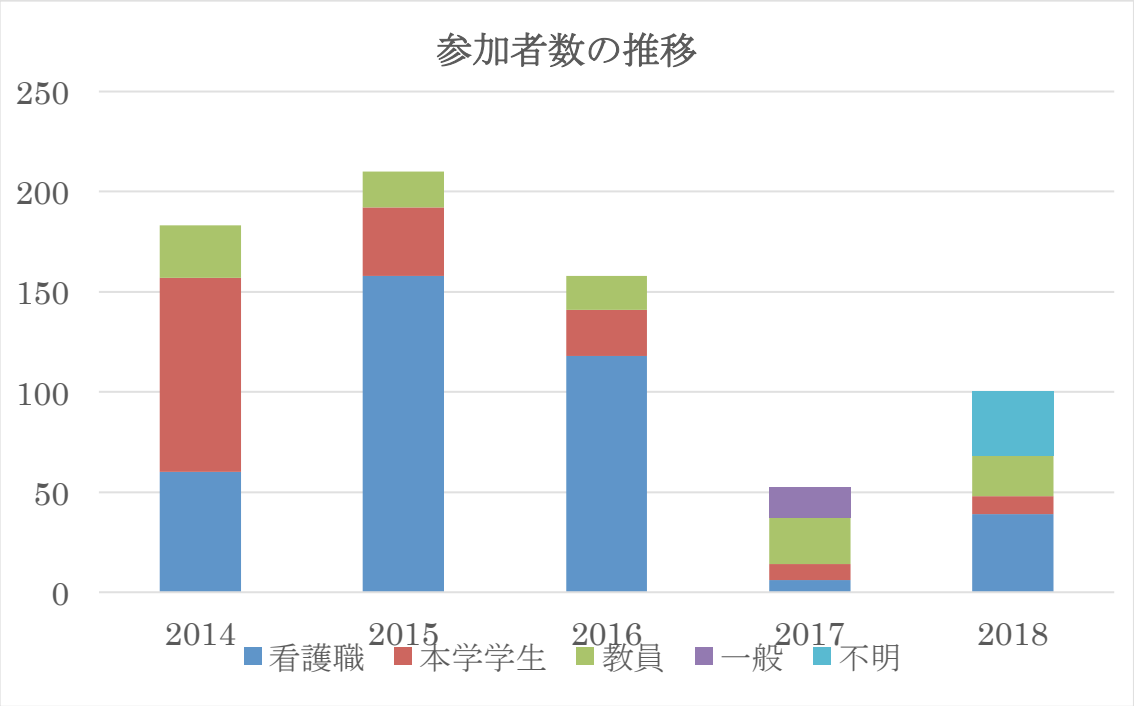
「看護師の語りから見えてくるもの」

講師：大阪大学大学院人間科学研究科教授　村上靖彦先生

【実績】
日時：平成 30 年 9 月 15 日（土）
場所：本学ホール
参加者：100 名（回答者 73 名の内、臨床の看護職 39 名、教員 20 名、学生 9 名）
講演内容：1.実践的構想力、2.語りは、実践の道のりを縮約するという 2 つの視点から、語りは、（知らず知らずのうちに）さまざまな距離感を表現するということ、例えば、患者との距離は、2 人称対 1.5 人称で表現されていたことなどが提示された。
アンケート結果：多くの参加者が良かったと回答し、「看護師の実践の語りを丁寧にとられている分析の仕方が勉強になりました」、「とても具体的で型をみる実践がよくわかりました」、「現場の状況がリアルに感じられて、分析の視点も斬新で面白いと思いました」などの自由記載を頂いた。他方で、パワーポイントが切れていて見づらかったこと等のご意見も多数頂いた。

総括：5 年間の実績から見た今後の方向性

本講座の 5 年間の参加者数は約 50 名から 200 名と、テーマや時期（他の講習会と重なる時期）などにより開きがあった。より多くの人に参加してもらえるよう、日程の選定や早くから広報を開始したり、様々な機関への広報活動を準備したりしていくなど、さらなる工夫が必要であると考える。また、近年、看護専門職に対する研修や講習会等が数多く実施されている中で、今後は地域住民を巻き込むなど対象者を広げるなど、看護専門職講座の役割についても、改めて考えていく必要があると考える。



HAT 神戸復興住宅における出前講座の５年間活動実績

概要

本講座は平成 15 年よりボランティア活動を展開している HAT 神戸復興住宅において、連合自治会より高齢化が急速に加速している地域高齢者の介護予防にむけ健康講座を開催してほしいとの要請をうけ実施したものである。本講座は 10 時から 12 時までのボランティア活動のうち 20 分程度を使い実施した。

●H26 年度に取り上げたテーマ

「はじめよう糖尿病予防」(4 月)、「はじめよう減塩生活」(5 月)、「気をつけよう 足梗塞と 足白癬」(6 月)、「 ストレッチで血管をしなやかに」(7 月)、「今日からはじめる認知症予防」(9 月)、「高齢者の急変について」(10 月)、「老年症候群とは」(11 月)、「知っていますか ? 老年期の心と身体」(12 月)、「笑いとヨガ」(1 月)、「緑茶と健康の深い関係」(2 月)。

参加人数：5 ～ 26 名

●H27 年度に取り上げたテーマ

「コーヒーと健康の深い関係」(4 月)、「健康チェックと笑いヨガ」(5 月)、「脳の働きと脳梗塞～楽しく定期点検！」(6 月)、「病気を防ぐ”腸”健康法～老化は夜つくられる～」(9 月)、「本当はすごい！ラジオ体操」(10 月)、「皆で楽しく、はしご体操」(1 月)、「貧血予防について」(3 月)

参加人数：15 ～ 30 名

●H28 年度に取り上げたテーマ

「首の痛みと予防について」(4 月)、「下肢静脈瘤について～足の血管のコブ～」(5 月)、「血管マッサージについて」(6 月)、「骨筋力アップ！」(7月)、「腎臓と腎臓病」(8 月)、「再び！ 高血圧と減塩生活」(9 月)、「知っておきたい"かぜ"のこと」(11 月)、「今年も楽々健康法－座りすぎの害と緑茶うがい－」(1 月)、「あなたの足は、どんな足」(3 月)

参加人数：10～25 名

●H29 年度に取り上げたテーマ

「ころばぬ先の転倒予防」（4 月）、「便通をよくして、病気予防」（5 月）、「はじめよう！歯の健康」（6 月）、「コツコツ！骨活」（7 月）、「高齢者のいのちをまもる食事とは」（8 月）、「糖尿病の食事療法のいろはの”い”」（9 月）、「誤嚥性肺炎を予防しましょう」（ 1月）、「足と爪の健康～いつまでも歩けるために～」（3 月）

参加人数：10～14 名

●H30 年度に取り上げたテーマ
「睡眠ことはじめ」（4 月）、「肺炎バイバイ～楽しく元気にお口の体操～」（5 月）、「脳トレ！ことはじめ」（6 月）、「”瞑想”入門」（9 月）、「脳梗塞のサイン」（10 月）、「”回想法”に挑戦」（11 月）、「”めまい”の予防」（１月）、「筋肉ってすごい！いつでもあると思うな自分の筋肉」（3 月）
参加人数：10～14 名

課題

現行の実施方法で変更が必要な点はないと考える。健康講座のテーマによっては専門看護師の協力を得ることが効果的であることがわかった。今後も専門看護師の協力を得ながら、高齢者の健康や介護予防など住民の健康ニーズに応じた健康支援の内容を継続する方針であるが、阪神・淡路大震災から 25 年が経過し、本活動の地域における位置づけや開催方法については検討が必要であると考える。

II. 教育・研究活動

Ⅱ．教育・研究活動の５年間のまとめ

1．教育・研究活動の概要

教育に関わる主たる活動は、地域住民が本学の講義・演習・実習にボランティアとして参加する「教育ボランティア導入授業」である。

教育ボランティアに関しては、教育ボランティアの募集と登録、教員への導入授業の呼びかけおよび実施報告のとりまとめ、教育ボランティアニュースレターの発行、教育ボランティア交流会の企画・運営、その他教育ボランティアに関わる業務について教務課と連携を図ることを担っている。また、今年度は教育ボランティア導入授業を大学の取り組みとして始めてから 10 年目の節目を迎えたことから、総括として教育ボランティア座談会を実施した。

研究に関わる主たる活動については、各々の教員が教育ボランティア導入授業等の教育活動と連動して研究を行うことを期待しているが、各々の教員の実施状況に任せており、COC 事業後はセンターとして特別な支援は行っていない。

2．教育ボランティアに関する活動経緯および概要

教育ボランティアの導入授業は、2006 年度現代的教育ニーズ取組み支援プログラム（現代 GP, 文部科学省）「地域住民とともに学び創る健康生活」の一環として開始され、現在も継続して行われているものである。

教育ボランティアの登録は 2009（平成 21）年から行われており、今年で 10 年目を迎えた。当初は、学内の教育活動にかかわるボランティアを「教育ボランティア」、健康生活支援学実習など学外での教育活動にかかわるボランティアを「現地ボランティア」と分けていたが、現在は学生の教育にかかわるすべてのボランティアを「教育ボランティア」と称している。

3．教育ボランティアの登録・活動状況

1）登録者数と活動状況

教育ボランティアの登録者数は年々増加し、2018 年度末時点の登録者数は 179 人（男性 60 人、女性 119 人）であった。しかし、登録はされているものの 10 年間で 1 度も教育ボランティアとして活動していない方もおり、その人数は 59 人（33.0%）であった。10 年間で 1 回以上活動したことのある教育ボランティアの平均活動回数は 6.2 回（最小値：1 回, 最大値：44 回）であり、単年度平均は 1 人あたり約 2 回（最小値：1 回, 最大値：7 回）であった。

2）教育ボランティア継続意思確認調査

登録されていても未活動者が多いという状況を鑑み、2019 年の 6～7 月にかけて、教育ボランティアの継続意思確認調査を行った。2019 年 6 月時点で登録のあった 180 人の教

育ボランティアに調査票を送付し、104 人から返答を得た（回収率 57.8%）。そのうち、教育ボランティアを継続すると答えたのは 73 人、継続しないと答えたのは 31 人であった。

継続しないと答えた 31 人（100.0%）は、性別は男性が 11 人（35.5%）、女性が 20 人（64.5%）、年齢は 30 代が 2 人（6.5%）、40 代が 1 人（3.2%）、50 代が 7 人（22.6%）、60 代が 6 人（19.4%）、70 代が 7 人（22.6%）、80 代が 5 人（16.1%）、不明が 3 人（9.7%）であった。また、ボランティア回数は 0 回が 10 人（32.3%）、1 回以上 5 回未満が 14 人（45.2%）、5 回以上 10 回未満が 7 人（22.6%）であった。継続しない理由は、健康上の理由、高齢のため、移動が困難なため、仕事が忙しい、時間的に難しい、予定が合わない、家族の体調不良、身内の介護、逝去等であった（表Ⅱ-1 参照）。

継続すると答えた 73 人（100.0%）は、性別は男性が 38 人（52.1%）、女性が 35 人（47.9%）であり、年代は 30・40 代が各 1 人（各 1.4%）、50 代が 7 人（9.6%）、60 代が 19 人（18.3%）、70 代が 35 人（47.9%）、80 代が 10 人（13.7%）であった。

教育ボランティアの導入授業は、2016 年度が 10 科目（学部 8, 大学院 2）、2017 年度が 8 科目（学部 7, 大学院 1）、2018 年度が 11 科目（学部 10, 大学院 1）、2019 年度が 13 科目（学部 12, 大学院 1）であった。

表Ⅱ-1　教育ボランティアを継続しないと答えた者の継続しない理由

概要	自由記述内容（一部要約）
健康上の理由のため(6)	・自分自身の体が悪くしばらく参加できていない ・高齢で体の不調のため ・日頃は体力維持に努めていますが、加齢の関係か病院通いが増えてきたため ・健康上の理由 ・私も主人も病院通いが増えてきたため ・足、腰、眼等、体調不十分なため
時間的に難しい 予定が合わない（5）	・なかなか教育ボランティアの行事に参加するのが、時間的にむずかしい ・なかなか、タイミングが合わないことが多い ・他のボランティア活動の方が忙しくなったため ・忙しくしており、なかなか参加できない状況なので ・活動が増えて続けられないため
高齢のため(4)	・高齢となったため（3） ・80 歳を過ぎて継続に自信がなくなったため
仕事が忙しい(4)	・仕事が忙しい（3） ・仕事をしていてなかなか協力できないので
移動が困難なため(3)	・高齢で股関節の手術をして移動が大変なため ・最近、足腰の故障で歩行が辛くなり、自宅から大学まで徒歩が多いため ・体は元気だが、我家から学校まで遠く、道中危険なため、継続を断念する
ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱに参加できないため(2)	・今まで、教育ボランティア活動に参加していないため ・参加できないことが多いので
家族の体調不良(2) 身内の介護	・家族の介護で時間を取られるようになったため ・家族体調不良のため
教育ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ数が多い(1)	・ボランティア不足かと思い登録したが、希望者が多いようだったので
ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱの立ち位置がわからない(1)	・ボランティアの立位置がわからなくなったたため（高齢の方が生きがいにしているなら、その枠は預け、もう数年たってから、また、参加したい）
逝去(1)	・ご逝去

3．教育ボランティア導入授業による効果

教育ボランティア導入授業による学生への効果は、教育方法の工夫が促されること、多様で実践的な学習を可能にすることがすでに報告されている。また、地域における施設医療から在宅ケアまでの流れを理解できる、退院後の生活を想像でき生活者の視点から看護計画の立案・評価ができるといった広い視野を持った学生の育成といった点では、過去の分析結果で継続看護に関する総合実習の評価項目の平均値が高く推移していたことから、一定の効果があると考えられている。

教育ボランティアへの効果は、各導入授業および実習後の教育ボランティアへのアンケートや意見交換から、学生から刺激を受けた、自分の健康や生活を振り返ったり見返す機会となった、学生の教育に役立てた、若い世代の考え方を学ぶことができた、自分も勉強ができた等の意見がみられた。

以上より、教育ボランティア導入授業による効果は、学生だけでなく、教育ボランティア双方への効果があると考えられ、授業導入当初の目標であった「地域住民とともに学び創る健康生活」に寄与していると考えられる。

4．教育ボランティアにかかわる課題と今後の発展

1）今年度までの教育ボランティアにかかわる課題

今年度は教育ボランティア登録制度を創設して 10 年目の節目となったこと、本学が独法化をしたことから、これまでの活動状況を振り返った結果、教育ボランティアに関わる課題として、以下の 4 点があげられた。

（1）教育ボランティアに 1 度登録すると、活動がなくても登録されたままとなる

この課題に関しては、今年度に調査票で教育ボランティア継続意思の確認を行ったが、残念ながら全員からの返信はなかった。教育ボランティアの高齢化や体調の変化および諸々の事情により、継続できない方もおられることから、毎年年度初めに教育ボランティア継続の意思確認を行う方向で検討する。

（2）教育ボランティア導入授業に関する依頼文やお礼状の発送回数が多い

昨年度まで授業毎に依頼文やお礼状（学生のレポート等学びを含む）が教育ボランティア宛に送付されていたが、教育ボランティアの方々からも郵送物が多いとの指摘があったこと、また、郵送代がかかることも考えられた。この課題に関して、今年度より、発送時期が近い案内文やお礼状についてはまとめて発送するよう対応した。今年度の現状について把握するとともに、次年度以降の方法を検討する必要がある。

（3）教育ボランティアの依頼・申込・結果報告方法が科目によってバラバラである

この課題に関して、教育ボランティア継続意思調査を行った際に、教育ボランティアが希望する連絡方法（郵送、FAX、メールのいずれか）を確認し、教育ボランティア個々人の希望に応じて連絡することとした。

（4）教育ボランティアを申し込んでもボランティアをできない人がいた

これまで、教育ボランティア授業への参加は「先着順」とされていたことから、活動を申し込んでも参加できない人がいたことが明らかとなった。そのため、今年度から、基本的に「抽選」とし、教育ボランティアとして活動を希望してくださる方が 1 年間に 1 度は活動できるように調整することとした。

2）教育ボランティア座談会からみえた課題と今後の発展

今年度は教育ボランティア導入授業を大学の取り組みとして始めてから 10 年目の節目を迎えたことから、活動の総括として教育ボランティア座談会を企画・実施した。座談会の目的は、教育ボランティア導入授業を今後更に発展させていくための本学の改善点や要望を明らかにすること、地域の活性化に向けて本学にどのような役割が期待できるかを検討することであり、本学の教育および教育ボランティアにかかわる活動への示唆を得ることであった。

開催日時は 2019 年 12 月 19 日（木）の 13：30～15：00、場所は本大学西館 W22 講義室であり、参加者は 12 人（男性 6 人、女性 6 人）であった。なお、参加者は登録年数や教育ボランティア経験回数、年齢、性別等が様々になるように考慮して選定した。教員の参加は 9 人（岩本、澁谷、清水、石原、岡永、丹野、波田、吉川、丸尾）であった。

座談会では、教育ボランティアの方が 4 人 1 組となり、そこに教員が 3 人加わって、合計 3 グループに分かれて意見交換をした。意見交換のテーマは、（1）本学授業・演習への参加を通じて考えた改善点・要望、（2）地域の活性化を考えたときに本学にどのような役割を期待するか、とした。

教育ボランティアで出された本学への要望・意見の概略を表Ⅱ-2 に示す。教育ボランティア座談会で出された意見は、【現行の教育ボランティア導入授業への意見・要望】と【授業の発展や地域との協働への要望・意見】の 2 つに大別された。

【現行の教育ボランティア導入授業への意見・要望】では、「元気な教育ボランティアだけを見て全体を認識しないか心配である」や「高齢者だけでなく子供や若い世代（中学・高校生）への対応も必要ではないか」、「患者設定を難しくしてはどうか（クレームのある患者等）」といった＜地域の様々な対象者を理解するための工夫が必要である＞ことや、「敬語の使い方を指導する必要がある」や「レポートのまとめ方の指導が必要である」といった＜アカデミックスキルの指導が必要である＞という意見がみられた。また、「成長した学生（1，2 年生が 3，4 年生になったとき）の状況が知りたい」や「教育ボランティアがかかわる前後でどのように考え方が変わったのかを教えてほしい」といった＜教育ボランティアへの学生の学びのフィードバック方法の検討が必要である＞、「患者役の設定を実情に合わせて変更した方がよい」や「演習時間は複数回に分けてした方がよい」といった＜効果的な授業の工夫が必要である＞という意見がみられた。

【教育ボランティア導入授業の発展や地域との協働への要望・意見】では、「地域の活動と授業がリンクするとよい」や「地域住民の生活の場で活動してはどうか」といった＜地

域で授業・活動をした方がよい＞　、「地域のイベントに学生が参加してほしい」や「地域組織と連携して学生が地域に出てほしい」といった＜地域のイベントに学生が参加してほしい＞という意見がみられた。また、「地域に接点のない人（独居高齢者や地域で孤立しがちな方）が集まれる場所や機会を大学で提供できるとよいのではないか」や「住民が気軽に悩みを吐露できる場を設定し学生が学ぶのがよいのではないか」といった＜大学が行う地域活動への新たな提案＞もあった。

これらの要望や意見を踏まえて検討した結果、教育ボランティアの方々へのフィードバックを丁寧にすることや学生の学びをフィードバックする方法の１つとして学生と教育ボランティアの方々との座談会等を企画することが考えられた。また、各科目で振り返りは行われているが、座談会を通して他の導入授業の内容を知る機会になること、各科目での振り返りとは違った意見を言いやすい雰囲気があったことから、定期的に座談会を開いて教育ボランティアの方々の率直な意見を聴く場を設けることが、本学の教育ボランティア導入授業や教育ボランティアの方々との関係性の発展につながると考えられた。

表Ⅱ-2　教育ボランティア座談会で出された本学への要望・意見

概略		要望・意見の要約
現行の教育ボランティア導入授業への意見・要望	地域の様々な対象者を理解するための工夫が必要である	・元気な教育ボランティアだけを見て全体を認識しないか心配である ・元気な教育ボランティアだけを見ると実際の現場では衝撃を受けるのではないか ・高齢者だけでなく子供や若い世代（中学・高校生）への対応も必要ではないか ・子どもや不安を持つ親御さんたちをフォローできるような授業があるとよい ・様々な障害を持っている状態でのケアを体験できる機会があるとよい ・患者設定を難しくしてはどうか（クレームのある患者等） ・病気等の療養経験を話せる場を広げてほしい
	アカデミックスキルの指導が必要である	・敬語の使い方を指導する必要がある ・レポートのまとめ方の指導が必要である ・普段の会話が重要ではないか
	教育ボランティアへの学生の学びのフィードバック方法の検討が必要である	・フィードバックは紙媒体を希望する ・成長した学生（1，2 年生が 3，4 年生になったとき）の状況が知りたい ・意見交換をしたときのメモがほしい ・学生のレポートが毎回ほしい ・教育ボランティアがかかわる前後でどのように考え方が変わったのかを教えてほしい
	効果的な授業の工夫が必要である	・演習時間は複数回に分けてした方がよい ・患者役の設定を実情に合わせて変更した方がよい ・患者役は経験者が事例の状況を経験した人がした方がよい
	その他	・年間のスケジュールがほしい
働への要望・意見	地域で授業・活動をした方がよい	・地域の場所で授業をしてほしい ・地域の活動と授業がリンクするとよい ・地域住民の生活の場で活動してはどうか
	地域のイベントに学生が参加してほしい	・地域のイベントに学生が参加してほしい ・地域組織と連携して学生が地域に出てほしい ・地域のイベントに学生が参加した方が社会性が身につくのはないか

学生ボランティアの活動状況とその支援

概要

学生の自主的活動として、以下のサークル活動がある。それ以外にも学生は自主的にボランティア活動を行っている。

なお、本学は、学生のボランティア活動を通じて、援助者としての自己の基盤作りをすることを目的に、「ボランティア活動」を科目として設定し、活動を支援している。

主なボランティア活動の活動状況とその支援

学生ボランティア活動に関しては、総合大学などでは学生のボランティアセンターが設けられ、情報共有や学生同士あるいは地域の団体と交流が図られている。本学でも学生のボランティア活動をサポートする機会を増やそうと、ボランティア交流会を開催した。交流会の目的は、１）当事者である学生が互いの活動を知ることを通してボランティアの魅力や意義を再発見すること、２）教職員が学生のボランティア活動の実際を知り、必要なサポートを共に考えることであった。活動内容の紹介方法として、ボランティア活動団体の顧問及び団体代表が今年度の活動内容、活動頻度、学生参加者数等について報告を行った（なお、「K-spring peer/ ピアカウンセリング (思春期ピアカウンセリング)」については、本報告書「思春期ピアカウンセリング」を参照)。

	団体名	顧問
1	アロマサークル	江川幸二
2	SCHOP（スコップ）	池田清子
3	ボランティア部	池田清子
4	コーラルレイン	二木啓
5	K-spring peer/ピアカウンセリング	高田昌代
6	まほうのハッぱー	＊

＊学生の自主運営で行っている活動であるため、顧問は設置されていない

アロマサークルの５年間活動実績

アロマサークルの活動におけるボランティア活動は、あざみ祭の時に行うハンドマッサージである。あざみ祭に向けて、アロママッサージの練習やアロマフレグランスの制作、石鹸の作成などをサークル内で行った。あざみ祭当日は、まちの保健室のボランティアの方々と合同で実施し、最近は同窓会メンバーとともに出展し、ハンドマッサージでは数多くの来場者とのふれあいの時間をもった。また、手作りのアロマ石鹸やエアフレッシュナーなどの販売も行った。平成 27 年には、自治会からの要請もあり、地域の夏祭りや学園

都市の高齢者を対象にアロマを用いたハンドマッサージを行った。

SCHOP（スコップ）の５年間活動実績

SCHOP は 2013 年 4 月に編入生が中心となり発足した災害支援ボランティアのサークルである。2013 年から 2016 年頃までは、東日本大震災の被災地に赴き、
仮設住宅で傾聴や作業等のボランティアを行っていた。また、年１回の公立大学学生大会フォーラムにも参加し、他大学の学生と災害について考えたり、防災や減災に関するアクションプランを提案するなど積極的に活動していた。また自大学と地域の減災のため学園都市の住民と日頃からネットワークを作る活動にも力を入れていた。しかし、2017 年頃から中心となる学生が減り、2018 年からは休部となっている。

2014 年　全国公立大学学生大会 LINK topos～地域における学生・教員・職員の取り組みと可能性～に参加した時の様子

ボランティア部の５年間活動実績

過去 5 年間を振り返ると、部活の中心となる学生は 3～4 名で、年々、参加者が減っている傾向がある。今年は阪神・淡路大震災から 25 年目を迎え、地域全体およびボランティア活動への参加者の高齢化も進んでいる。教員にとってはこれまでボランティア活動を通して育んできた住民との関係はこれからも重要と考えるが、学生にとって本ボランティア活動は、地域で暮らす高齢者の自立支援、見守り支援の一環である。災害復興住宅での

健康支援活動の意義については、25 年を機に再考する時期にきているのではないかと考える。

コーラルレインの５年間活動実績

本学「コーラルレイン」は、2001年に設立されて以来、様々な音楽を歌って自らが楽しみながら、聴いてもらう人々と夢や癒しを共有できたらという思いとともに活動してきた。中央市民病院での毎年恒例のコンサートをはじめ、介護老人施設、患者さんの会等でコンサートを開催するなど、患者さんやご家族とふれあいながら歌声を披露する他、HAT神戸でのクリスマスコンサート、西区青少年フェスティバルや本学ホールで開催される学園都市音楽会など地域の様々なイベントに参加し、ほぼ隔年で参加している学園都市音楽会では会場受付等のボランティアも担当するなど、地域交流にも積極的に取り組んできた。講義や実習等に忙しく、また、学年の異なるメンバーが揃っての練習が困難な中、選曲から練習方法まで学生同士が相談しながら作りあげている活動で、専門的な訓練や指導を受けながら行っているのではないが、かえってそれが親しみや清新さを伴って、多くの方々がコーラルレインの歌声に楽しさや希望、癒しを感じてくださっているようである。この５年間においても、2015年に「神戸キワニスクラブ社会公益賞」を受賞したほか、2019年度の「西区善行青少年表彰」を受けたことは、このような活動を継続的に行うことができたことの一つの証左であると考える。本学学生（団体）表彰についても、2015年に続いて2020年の表彰の対象となったが、これはとりわけある年度の活動に対しての表彰ではなく、継続的活動に対しての温かい応援であると位置づけ、さらに自由で自発的な活動を展開していきたい。近年は、学年によって入部者の少ない年もあり、今後の安定的な活動のためには、学内外でもっと活動を知ってもらうほか、新入生や活動に興味を持っている学生への働きかけにも力を入れ、楽しい活動の輪を広げたい。

思春期ピアカウンセリング（学内活動と学外活動の同時活動）の５年間活動実績

１．活動概要

思春期ピアカウンセリングは、思春期にあるピアカウンセラー(大学生や専門学校生など)が同世代の人々を対象として生と性に関する健康教育を行う教育方法の１つである。世界のさまざま国においてもこの手法が有効であることが実証され、日本においても厚生労働省の健やか親子 21 に取り入れられるなど思春期保健活動の中にとり入れられている。現在では、全国各地で思春期ピアカウンセラーの養成、思春期ピアカウンセリング・ピアエデュケーションが行われている。

兵庫県では、平成 16 年度よりひょうご思春期ピアカウンセリング研究会が思春期ピアカウンセラーを養成し、兵庫県内で活動を行っている。兵庫県の思春期ピアカウンセリング活動は、本学の学生が中心となり、積極的に取り組んでいる。現在のこの活動は大きく分けて以下の５つである。

①中学校、高校の集団を対象に、神戸市内はもとより兵庫県下の中学校、高校に生と生殖の自己決定の支援のための健康教育

各学校から依頼があれば「自分の宝物」「わたしとわたしとあなた」などのテーマで、友人関係・恋愛関係でのピアプレッシャーや性感染症（STI）や妊娠、デート DV など、自分を大切にするための生と性の自己決定の内容を取り入れている。

②中学生・高校生のための個別のカウンセリング

須磨区名谷駅近くのユースプラザや中・高校において、中高生や大学生の個別や小集団でのピアカウンセリングであるピアルームを開催している。下校帰りの学生等と話すなかで、カウンセリング技術を用いながら、自然と悩みを受け取れるように、中学生や高校生の心地よい時間を提供している。

③若者が出会う性と生に関する課題や思春期ピアカウンセリング活動の啓発活動

社会へＨＩＶやデートＤＶの啓発活動を行っている。

④ピアカウンセラーの後輩育成

ベーシックコースとブラッシュアップコースの２回/年、ひょうご思春期ピアカウンセリング研究会主催の養成講座に、先輩ピアとして養成者と共に後輩育成をしている。

⑤全国のピアカウンセラーとの情報交換・交流

ジャパン・ユース・フォーラムは、日本家族計画協会、日本ピアカウンセリング・ピアエデュケ―ション研究会の主催で国立東京オリンピック記念青少年総合センターで、これまでに４回実施されている。全国から代表する若者が集まり、本学の思春期ピアカウンセラー3 名が参加した。思春期から青年期にかけら若者たちが直面する問題を、若者たち自身が検討し、政策提言「若者宣言」を作成・発表している。

全国ピアは、全国のピアっ子が参加し活動の情報交換、交流を盛んにおこない、自己研鑽や仲間の輪を広げる場となっている。

２．活動実績

①中学校、高校への思春期ピアカウンセリング・ピアエデュケーション

	実施回数 (回)	参加者数 （学生数）	ピアっ子 延べ人数	備考
平成 26 （2014）年	（中学校） 4 （高　校） 11	2,375 人	102 人	須磨翔風高、笹山産業高丹南校、明石南高、三田祥雲館高、西脇北高、神戸北高 尼崎市小田北中、播磨中、有野北中
平成 27 （2015）年	（中学校） 10 （高　校） 9 （大　学） 1 （特別支援学校等） 3	2,578 人	136 人	市看 三田西陵高、須磨翔風高、笹山産業丹高南校、三田祥雲館高、京都大谷高 氷上中、今田中、丸山中、播磨中、有野北中 神出学園、氷上特別支援
平成 28 （2016）年	（中学校） 12 （高　校） 14 （特別支援学校等） 3	1,817 人	196 人	三田西陵高、宝塚東高、須磨翔風高、三田祥雲館高、京都大谷高 播磨中、有野北中、多聞中 神出学園、氷上特別支援
平成 29 （2017）年	（中学校） 15 （高　校） 18 （専門学校） 1	1,760 人	145 人	三田西陵高、宝塚東高、須磨翔風高、三田祥雲館高、京都大谷高 播磨中、神戸松蔭中、有野北中、多聞中 八鹿看護学校
平成 30 （2018）年	（中学校） 2 （高　校） 11	685 人	57 人	宝塚東高、三田祥雲館高、宝塚高、宝塚北高 氷上中、神戸松蔭中

②中学生・高校生のための**個別のカウンセリング**

	実施回数(回)	参加者数	ピアっ子延べ人数	備考
平成 26（2014）年	28	211 人	106 人	名谷ユースプラザ、中高校、神戸市垂水区学習意欲支援事業
平成 27（2015）年	23	263 人	58 人	名谷ユースプラザ、中高校、神戸市垂水区学習意欲支援事業
平成 28（2016）年	11	177 人	24 人	名谷ユースプラザ
平成 29（2017）年	12	84 人	38 人	名谷ユースプラザ、篠山市
平成 30（2018）年	9	108 人	23 人	名谷ユースプラザ

	実施回数(回)	参加者数（対象数）	ピアっ子延べ人数	備考
平成 26（2014）年	1	14 人	6 人	JICA アフリカ地区担当官対象
平成 27（2015）年	3	219 人	9 人	フェミニストカウンセリング研修会、神戸市養護教諭研修会、思春期保健研修会
平成 29（2017）年	1	約 500 人	8 人	AIDS フェスタ（神戸市と共同）
平成 30（2018）年	2	約 700 人	20 人	パープルリボンフォーラム AIDS フェスタ（いずれも神戸市と共同）

③若者が出会う性と生に関する課題や　思春期ピアカウンセリング活動の啓発活動

●平成 27 年度　兵庫県思春期保健対策「若者の性と生を考えよう」キャンペーン事業により、クリアファイルのデザインを考案（平成 21 年度に作成したデザインをリニューアル）

④思春期ピアカウンセラーの後輩育成

ベーシックコースとブラッシュアップコースの２回/年

	実施回数(回)	参加者数	ピアっ子延べ人数
平成 26（2014）年　6/28,29、7/5,6、2/14,15	2	26 人	13 人
平成 27（2015）年　6/27,28、7/4,5、2/13,14	2	17 人	16 人
平成 28（2016）年　6/25,26、7/2,3、2/11,12	2	31 人	13 人
平成 29（2017）年　6/24,25、7/1,2、2/10,11	2	44 人	14 人
平成 30（2018）年　6/16,17,23,24、2/9,10	2	32 人	18 人

⑤全国・世界のピアカウンセラーとの情報交換・交流

		参加ピアっ子数	備考
平成 27（2015）年	全国ピア in　福島	8 人	
平成 28（2016）年	第 1 回ジャパン・ユースフォーラム	2 人	国立オリンピック記念青少年総合センター
平成 29（2017）年	第 2 回ジャパン・ユースフォーラム	2 人	国立オリンピック記念青少年総合センター
	全国ピア in　鳥取	5 人	
平成 30（2018）年	第 3 回ジャパン・ユースフォーラム	2 人	国立オリンピック記念青少年総合センター
	東・東南アジア・太平洋地域ユースフォーラムに参加	1 人	国際家族計画連盟（IPPF）主催クアラルンプールで開催

●平成 30（2018）年　神戸ユース賞受賞

３．成果

①中学校、高校への思春期ピアカウンセリング・ピアエデュケーション

参加者からは、毎回アンケートで評価を行っており、身近な大学生でよかった、分かりやすかった、自分を大事にしようと思った、同じクラスでも他の人の意見を聞けて良かった、などの意見がたくさん寄せられている。思春期ピアカウンセラーとしては、毎年行われている養成講座でブラッシュアップをしたり、デート DV や SNS の問題に関する講習会を聴いて知識を増やしたりと、自己研鑽を積んでいる。

②ピアサポートルーム

名谷は継続して行っていることもあり、須磨翔風高校の高校生が多く寄って話している。思春期ピアカウンセリングを行った中学校や高校で、思春期ピアカウンセリング修了後行う時には、進学のことや部活のことなどを話にくる生徒が多くみられる。各中学校や高校におけるピアルームも、開催学校の教諭の取り計らいにより、年々多くの学生が集まって、悩みともおしゃべりとも言えない会話をピアっ子と行うことで、顔つきが明るくなり、自己決定に繋がっていると思われる。

③若者が出会う性と生に関する課題や思春期ピアカウンセリング活動の啓発活動

これまで HIV の啓発は、毎年中学校や高校で、そして全国一斉ピアとして 12 月 1 日に全国で HIV 啓発活動の一端として行ってきた。2017 年より神戸市の啓発事業に協力することとなり、ピアカウンセラーが若者の感覚で啓発を行い、継続している。「レッドリボン」の HIV は治る病気と勘違いされているところもあり、ピアカウンセラーも HIV 関連の知識を学び、啓発に力を入れている。また、2017 年より DV についても同様に、若者目線で活動を行っている。

HIV、DV とも関心のある市民の方々が多く、啓発グッズの配布は瞬く間に終了してしまうほどであった。

④思春期ピアカウンセラーの後輩育成

養成講座を受ける思春期ピアカウンセラーは、その役割を先輩ピアカウンセラーが行っている状況から学ぶと同時に、先輩ピアカウンセラーとも仲間意識を感じている。この関りが、今後、活動のきっかけとなっている。

⑤全国・世界のピアカウンセラーとの情報交換・交流

2 年に 1 回開催される全国ピアは、日本のなかでもピアっ子の人数、活動とも 2019 年度は、群馬で全国の思春期ピアカウンセラーが参加し、ひょうごピアっ子も 27 人参加した。全国の活動状況や若者の役割を夜を徹して話し合い、自分たちの活動が広がるととも

に、振り返るいい機会になった。

全体的に、思春期ピアカウンセリング活動は、コミュニケーション能力が非常に高まる。また、カウンセリング技法の中でも傾聴や、感情を聞くという技法の上達も見られる。これは、初めて会う中学生や高校生と一緒に話したり、様々な大人との調整などしたりという機会がそれらの能力を高めていると考えられる。

Every Child a Wanted Child

家族と健康

健康教育広報紙

一般社団法人 日本家族計画協会

若者が提言！

「若者の居場所づくり」と「信頼できる大人の存在」

～第3回 ジャパン・ユース・フォーラム開催～

2018年12月23・24日、国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区）において、第3回ジャパン・ユース・フォーラムが開催された（主催＝JFPA若者委員会［U－COM］）。全国各地から6人の大学生が参加し、若者の視点による政策提言を作成・発表した。要旨をここに紹介する。

今回発表された「若者宣言」と参加者たち。2日間のプログラムを通して互いに学び合い、若者の視点による政策提言を練り上げた

孤立感、コミュニケーション不足

今、若者に起きている問題として、JPOSのような逆説的な言葉が出てきているのは、それだけ人とのつながりやコミュニケーション不足があるからだと思います。そして、これらの問題に対処するためには、どうしたらよいのか、ということが必要であると思いました。このことのもとになるのは三つあると、一つは「居場所をつくること」、もう一つは「信頼できる人をつくること」だと思います。

居場所をつくる

コミュニケーションの方法は、昔と比べて、SNSやアプリなどを用いたオンラインの二つがあります。これらは対面で行なわれるものであり、それぞれに対処するほうがよいのか、どうしたらよいのか、ということが必要であると思います。

あれは、オフラインでは、相談や話し相手としてなくてはならない存在となっていると思います。

オンラインでは、匿名性があるので、自分の悩みを相談しやすいという側面があります。

また、オンラインでは、そのような人に出会えるかどうかという問題があります。

そこで、どうしたら「信頼できる人」になれるのかという問題を考えました。

「信頼できる人」になるためには、まずあなたがあなたでいることが大切だと思います。

信頼できる大人の条件

●大人に向けて

①信頼できる大人の条件として、①人を認める心、②時間の余裕、③自己開示、④自尊感情、⑤自己肯定感、⑥自己決定、⑦自己責任を挙げました。

※詳しくは「若者宣言」リーフレットで紹介します。2月末完成予定。

ジャパン・ユース・フォーラムとは

思春期から青年期にかけて若者が直面する生と性の健康に関する問題について、若者自身が検討し、政策提言「若者宣言」を作成・発表するイベント。テーマは、若者が自らの問題意識に沿って決定する。これまでに若者の自殺防止、セクシュアルマイノリティーに関する諸問題、性教育・性に関する情報提供の在り方などがテーマとして取り上げられた。

リプロダクティブ・ヘルス／ライツ

家族と健康

健康教育情報紙

一般社団法人 日本家族計画協会 リプロ・ヘルス推進事業本部 健康教育推進本部

若者の視点で、若者による政策提言を

第1回 ジャパン・ユース・フォーラム開催

全国14の地域・団体から集まった思春期ピア・カウンセラーたち。若者ならではの意見も盛り込まれた提言が打ち出された

LGBT（セクシュアルマイノリティー）

若者の自殺

若者の人工妊娠中絶

若者が提言する性教育と情報提供の在り方

第2回 ジャパン・ユース・フォーラム開催

1月13～14日、第2回ジャパン・ユース・フォーラムが、国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区）で開催された（主催＝ＪＦＰＡ若者委員会［Ｕ－ＣＯＭ］）。このイベントは、思春期から青年期に若者が直面する健康に関する問題に対して、若者自身が学び合い、検討し、政策提言「若者宣言」をまとめるというもの。

今回、全国各地から18～22歳の学生10名が参加した。２グループに分かれ、性教育や性に関する情報提供の在り方について検討・発表した。

グループ①歩みたい人生を歩むために ～生と性について～

子どもや若者のニーズと、親をはじめとした大人、そして関係機関の認識との間にズレがあることに着目し、性に関する正しい情報を得る上で、それぞれに対して行っていくべきアプローチを提言した。

子どもや若者には、それぞれの時代に合った性教育に対するニーズがある。子どもや若者が主体となってニーズを話し合い、その声を社会に届ける仕組みが必要であると述べた。

一方、親をはじめとした大人側にも、子どもに受けさせたい性教育について考える機会が必要である。保護者会、子育て教室などを利用して、大人たちもディスカッションをし、認識や理解を深めていく重要性を訴えた。

最後に、関係機関についての提言として、①身近で正しい知識を得るための手段の整備②性教育に携わる活動への支援体制の整備ーを求めた。

現在、若者たちが情報を得ようとする場合、多くはインターネットが使われる。性に関する情報もそれは同じであるにもかかわらず、政府や信頼のおける機関の情報にたどり着くことは難しいと指摘。若者たちに知る機会を提供するための環境整備をすることを求めた。

また、性教育に携わる人が活動の幅を広げられるよう、関係機関による支援体制の重要性についても述べた。

グループ②知らないことから知ってもらう ～ＳＮＳから始める性教育～

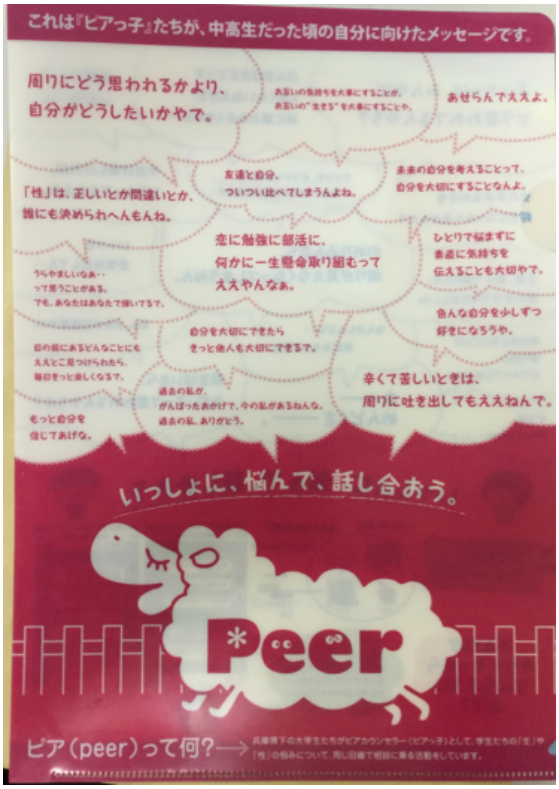
若者たちの性に関する認識を深めながら、包括的な性教育を行うための環境づくりを提言した。

まず、若者たちにとって、性というものがよく分からない存在になっている現状を指摘。性について「知るべきことがたくさんある」あるいは「ほとんど知らない」ということを、若者たち自身が認識するところから始める必要性を説いた。

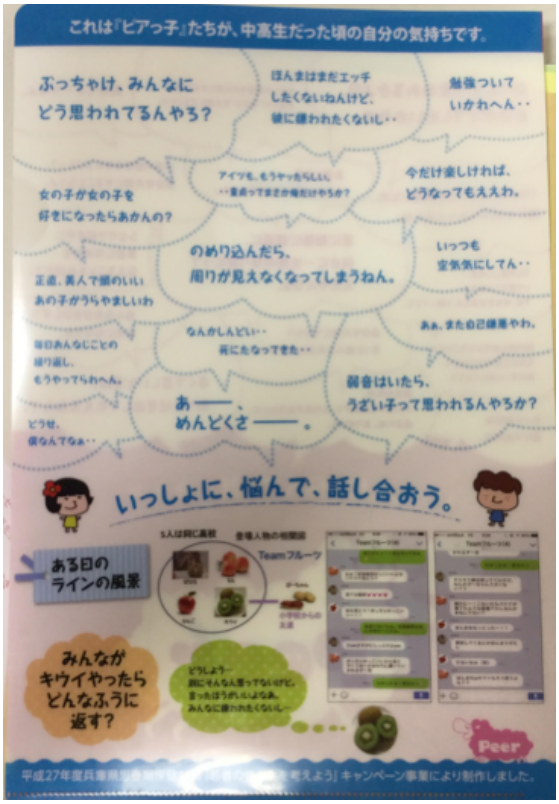
方法として、専門家や政府、信頼できる機関が支えるソーシャル・ネットワーキング・サイト（ＳＮＳ）の設置を提案。性についての知識を得ると、心身の健康を保つ上でいいことがあるということを配信する。このＳＮＳの運営案には、積極的な周知により若者の関心を引くだけでなく、性教育の記事や動画を閲覧することでポイントがたまるといった、利用者のインセンティブとなる仕掛けも盛り込まれた。

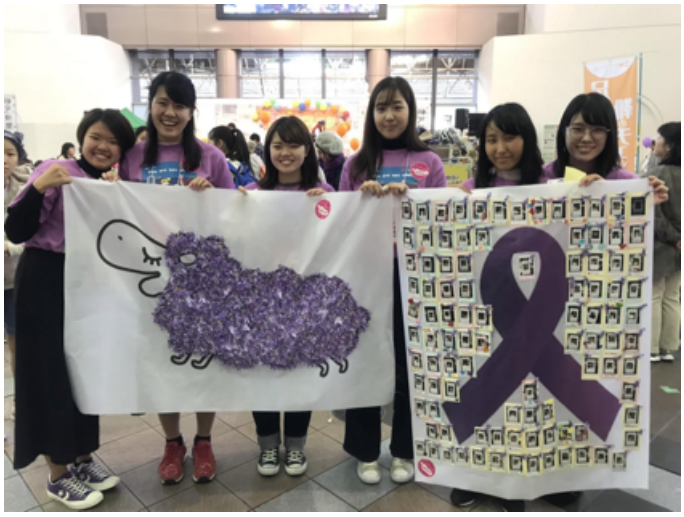
併せて「若者サポート施設」の設置も提案された。これは、保健所、学校の保健室や、繁華街などに、若者が立ち寄りやすい施設を設置するというもの。常に専門家を置き、性に関する相談などができるほか、前述のＳＮＳのポイントを使って生理用品やコンドームなどに交換できるといった工夫を提言した。

＊「若者宣言」の詳細は、今後リーフレットにまとめ、配布する予定。


これは『ピアっ子』たちが、中高生だった頃の自分に向けたメッセージです。
周りにどう思われるかより、
自分がどうしたいかやで。
あせらんでええよ。
「性」は、正しいとか間違いとか、
誰にも決められへんもんね。
友達と自分、
ついつい比べてしまうんよね。
未来の自分を考えることって、
自分を大切にすることなんよ。
恋に勉強に部活に、
何かに一生懸命取り組むって
ええやんなあ。
ひとりで悩まずに
素直に気持ちを
伝えることも大切やで。
自分を大切にできたら
きっと他人も大切にできるで。
色んな自分を少しずつ
好きになろうや。
幸くて苦しいときは、
周りに吐き出してもええねんで。
過去の私が、
がんばったおかげで、今の私があるねんな。
過去の私、ありがとう。
もっと自分を
信じてあげな。
いっしょに、悩んで、話し合おう。
Peer
ピア（peer）って何？

こうべユース賞
社会部門
神戸市看護大学
ボランティア団体 K-Spring Peer 様


これは『ピアっ子』たちが、中高生だった頃の自分の気持ちです。
ぶっちゃけ、みんなに
どう思われてるんやろ？
ほんまはまだエッチ
したくないねんけど、
嫌に嫌われたくないし‥
勉強ついて
いかれへん‥
女の子が女の子を
好きになったらあかんの？
今だけ楽しければ、
どうなってもええわ。
のめり込んだら、
周りが見えなくなってしまうねん。
いつも
空気読にしてん‥
正直、美人で頭のいい
あの子がうらやましいわ
なんかしんどい‥
死にたくなってきた‥
ああ、また自己嫌悪やわ。
毎日みんなにごとの
繰り返し、
もうやってられへん。
あ――、
めんどくさ――。
弱音はいたら、
うざい子って思われるんやろか？
どうせ、
僕なんてなぁ‥
いっしょに、悩んで、話し合おう。
ある日の
ラインの風景
Teamフルーツ
みんなが
キウイやったら
どんなふうに
返す？
どうしよう‥
別にそんな人思ってないけど、
まったほうがいいよなあ、
みんなに嫌われたくないし。
Peer



まほうのハッぱーの５年間活動実績（学外活動）

活動内容

　月に1回第3土曜日に大学生が企画した、普段子どもたちだけでは出来ないような身体を使った遊びや、工作などに子どもたちを呼び、大学生と子どもが一緒になって楽しく遊んでいます。

まほうのハッぱーの由来が、

「まほうの」…いろいろ作り出すこと

「ハッ」…はっ！とひらめく

「ぱー」…手のひらのぱーで表現する

というものであるので、子どもたちに楽しんでもらいたい、何か新しいことに挑戦したり、何か得られるものがあってほしいという思いで活動しています。

活動実績

●2014 年

学生参加者数：神戸市看護大学 19 名，流通科学大学 4 名，神戸芸術工科大学 1 名，兵庫県立大学 1 名

●2015 年

5 月 ： 児童館のプレイルームをめいいっぱい使った楽しいゲーム

6 月 ： 秘密基地作成

7 月 ： お化け屋敷

8 月 ： 夏フェス（ 児童館恒例行事 ）

10 月 ： ハロウィンイベント、紙などを使ってかぼちゃのランタン作り

11 月 ： 公園での運動会

12 月 ： クリスマスイベント（@ 市看、恒例行事 ）

1 月 ： お餅つき大会（@ 中学校、恒例行事 ）
2 月 ： 鬼のお面作り
・学生参加者数：神戸市看護大学　16 名 , 流通科学大学　　5 名
●2016 年
5 月:足ペタ(公園に大きな模造紙を広げて手や足に薄めた絵の具をつけてペタペタする)
6 月:ニュースペッパー(ちぎった新聞をプレイルームに広げて遊ぶ)
7 月:アイス作り
8 月:夏フェス(児童館恒例行事)
10 月:ハパリンピック(オリンピックみたいに競技をする)
11 月:児童館全体を使った宝探しゲーム
12 月:クリスマスパーティ(様々なゲームであそぶ、ハッぱー手作りのスノードームをクリスマスプレゼントに)
1 月:お餅つき大会(@中学校、恒例行事)
2 月:工作(スーパーボール作りなど)
・学生参加者数：神戸市看護大学 12 名、流通科学大学 2 名、その他 1 名
●2017 年
5 月:足ペタ(公園に大きな模造紙を広げて手や足に薄めた絵の具をつけてペタペタする)
6 月:ニュースペッパー(ちぎった新聞をプレイルームに広げて遊ぶ)
7 月:工作
8 月:夏フェス(児童館恒例行事)
10 月:ハパリンピック(オリンピックみたいに競技をする)
11 月:児童館全体を使った宝探しゲーム
12 月:クリスマスパーティ(様々なゲームであそぶ、ハッぱー手作りのクリスマスプレゼント)
・学生参加者数：神戸市看護大学 8 名、神戸芸術工科大学 4 名、その他 1 名
●2018 年
5 月:足ペタ(公園に大きな模造紙を広げて手や足に絵の具をつけてペタペタする)
6 月:ニュースペッパー(ちぎった新聞をプレイルームに広げて遊ぶ)
7 月:お化け屋敷
8 月:夏フェス(児童館恒例行事)
10 月:ハロウィンに関した工作や遊びを行う
11 月:色遊び
12 月:クリスマスパーティ(様々なゲームで遊ぶ、スノードーム作り)
1 月:お餅つき大会(中学校、恒例行事)
・学生参加者数：神戸市看護大学 10 名、神戸芸術工科大学 6 名、流通科学大学 4 名、その他 1 名

Ⅲ. 国際交流活動

国際交流活動の５年間の実績

1．国際交流活動の変遷

2018 年度までの本学の国際交流活動は、①国際フォーラム、②海外看護学研修、③海外の大学との学術交流提携、の三つを中心に実施してきた。

このうち、①は本学開学間もないころから 2016 年度まで通算 18 回を数える恒例行事の一つと位置付けられてきた。しかし有料であったことや、地域の多くの方々の興味を引くようなテーマが見つけづらいことから、ターゲットである近隣地域の保健・医療・福祉関係領域の実践家および研究者の更なる参加を促すことには限界を感じてきたこと、そしてこれまで 20 回近く開催してきて、概ね所期の目的を達成できたと考えられることから、役割を終え廃止した。参考までに、直近 4 回の国際フォーラムの演題と講師名を次節 1 項に列挙しておく。

②は本学学部生の選択科目として開講されており、学生たちからの高い人気を誇る授業である。当初は米国ワシントン州シアトルのみが研修先となっていたが、2016 年度からはベトナムのダナンがこれに加わった。シアトルでの研修は、病院・特別養護老人ホームの見学、ワシントン大学看護学部におけるアメリカの保健医療制度と看護職の役割に関する講義などのほか、語学研修も開講している（次節 2 項①）。ダナンでは市内の女性・子ども病院、総合病院、がん専門病院の見学、看護学部授業や演習への参加、幼稚園における健康教育の提供などを実施している（次節 2 項②）。いずれも現地ではホームステイにより滞在することで、異国・異文化の生活を体験している。また、帰国後には参加学生らによる報告会を開催し、自分たちの体験を他の学生や教員との共有を図っている。

③に関して、本学では 2012 年に米国ワシントン大学（University of Washington: UW）と学術交流提携（Memorandum of Understanding: MOU）を結んだ。その後 5 年間を経て同提携を更新する運びとなり、引き続き 5 年間、UW との活動が継続されることとなった。また、ベトナムのダナン大学との間にも、2016 年に MOU が締結された。なお、前述の 2 大学以外でも、本学の在外研究制度を利用し、短期間訪問した研究活動を積極的に実施している。2013～2018 年度の訪問先と研究テーマの一覧を次節 3 項に示す。

なお 2018 年度には単発で海外からの訪問・研修団を受け入れた。一つは JICA 主催の研修で来日中であったバングラデシュ看護師研修団による表敬訪問、もう一つは JST（科学技術振興機構）に係る事業であるさくらサイエンスプラン（日本・アジア青少年サイエンス交流事業）の採択に伴うベトナムからの研修団の招聘である。どちらも本学の法人化以降における国際交流活動の拡大の契機となることが期待できる。

2．活動実績

１）国際フォーラム

2016 年度（第 18 回）

看護研究における混合研究法の基礎と実践例

―遠隔医療を用いた疼痛マネジメントの確立に向けて―

Ardith Doorenbos 教授

（ワシントン大学看護学部生物行動看護学・ヘルスシステム分野）

2015 年度（第 17 回）

米国のコミュニティメンタルシステムと看護

上月頼子准教授（ワシントン大学看護学部地域精神看護学）

2014 年度（第 16 回）

在宅の認知症高齢者とその介護者を支援するための協力活動：

英国におけるリサーチエビデンス

Claire Goodman 教授

（ハートフォードシャー大学プライマリ&コミュニティケア・リサーチセンター）

2013 年度（第 15 回）

臨床看護におけるシミュレーション

―シミュレーション教育のプログラム立案から評価方法の基礎について―

Richard A. Henker 教授および John M. O'Donnell 教授

（ピッツバーグ大学看護学部急性期看護学）

2）海外看護学研修

①シアトルでの研修の事例（2018 年度）

2018 年　神戸市看護大学　海外看護学研修プログラム

「米国・シアトル看護学研修」

米国の医療制度や看護について数々の医療現場を視察し、実践看護を深く学びます。ワシントン大学のキャンパスは、美しく全米でも憧れのキャンパスです。そこで行われる毎日の英語レッスンや視察事前セミナーでは、予習として視察現場の知識や看護現場で使われる英語に触れ、視察・訪問での学びをより深くします。またホームステイを通し、異文化を積極的に体験することができます。アメリカの生活を垣間見る絶好のチャンスです。

University of Washington

楽しい English Lesson

【アトラス日程】ご出発年：2018 年

1　3 月 14 日（水）	2　3 月 15 日（木）	3　3 月 16 日（金）	4　3 月 17 日（土）	5　3 月 18 日（日）	6　3 月 19 日（月）	7　3 月 20 日（火）
伊丹空港集合 12:00 全日空 24 便にて羽田空港へ＊羽田空港で添乗員とミート 14:05リムジンバスで成田空港へ 17:25 デルタ航空 166 便にてシアトルへ　【機内泊】 10:48 シアトル着 専用車で Eastlake Meeting Point へ ホストファミリーと面会 ホームステイ先へ 【HOMESTAY】	09:30：ワシントン大学へ ＊オリエンテーション ＊英語レッスン プレイスメントテスト 13:00: 日本人看護師によるセミナー：アメリカと日本の看護の違い 【HOMESTAY】	09:30 ワシントン大学へ 視察事前セミナー： 英語レッスン:ホームステイに必要な会話などを学ぶ 13:00：英語レッスンと視察事前セミナー： 視察に備えた予備知識や簡単な看護英語を学ぶ 【HOMESTAY】	終日 ダウンタウン視察 ＊シアトルダウンタウンやウオーターフロント、スターバックス 1 号店や、スペースニードルへ バスで各自ホームステイ先へ 【HOMESTAY】	終日　自由研修 ＊ホストファミリーや友達と自由に過ごす 【HOMESTAY】	09:30 ワシントン大学へ 講義　アメリカの医療制度と看護教育について　ワシントン大学看護学部 上月頼子先生より 13:30:視察 Harborview Medical Center （通訳付） 【HOMESTAY】	09:30 ワシントン大学へ 英語レッスンと視察事前セミナー： 13:00 ： 視 察 Country Doctor Community Health Clinic ＊低所得者へ医療を提供するプライマリーケアクリニックで看護師の役割を学ぶ（通訳付） 【HOMESTAY】

8　3 月 21 日（水）	9　3 月 22 日（木）	10　3 月 23 日（金）	11　3 月 24 日（土）	12　3 月 25 日（日）	13　3 月 26 日（月）	14　3 月 27 日（火）
09:30 ワシントン大学へ 英語レッスンと視察事前セミナー 13:00：視察 ワシントン大学看護学部:ミュレーションセンターを視察(通訳付) 【HOMESTAY】	09:30：ニッケイマナー ＊軽介護付き老人ホームで入居者と触れ合う 14:15：敬老ノースウエスト ＊施設内の視察や、看護師からのセミナーを通して、日系ﾅｰｼﾝｸﾞﾎｰﾑの成り立ちや歴史についても学び、高齢者看護・リハビリについて学ぶ 【HOMESTAY】	09:30 ワシントン大学へ 英語レッスンとプレゼンテーションの準備 ＊Closing Ceremony 研修での学びを発表 ＊修了証書の授与 午後：フリータイム 【HOMESTAY】	終日　自由研修 OP(希望者のみ)エクスカーション：フェリーで Bain Bridge 島 へ ＊日本人にもゆかりのベインブリッジ島は、ノースウエストで唯一現存する初期日系移民の居住跡地で、日系人の歴史が始まった場所 【HOMESTAY】	終日　自由研修 ＊ホストファミリーや友達と自由に過ごす 【HOMESTAY】	08:00 ワシントン大学集合 専用車でタコマ空港へ 11:37 デルタ航空 167 便にて、一路帰国の途へ（成田空港へ） 【機内泊】	14:30　成田空港着 ＊添乗員終了 18:10 成田空港から全日空 2179 便にて伊丹空港へ 19:35 伊丹空港到着後、解散

＊　日程内容は、訪問施設先などの事情により変更となる場合があります。

Swedish Hospital で分娩のシミュレーションに挑戦

ニッケイマナーでレジデンツにダンスを披露

Country Doctor Community Clinic
さまざまな看護師からのトーク

Harborview Medical Center
Medic 1 の中で

暖かなホストファミリー

②ダナンでの研修の事例（2018 年度）

神戸市看護大学海外看護学研修スケジュール「ベトナム・ダナン」

KCCN DANANG NURSING STUDY TOUR 2018.3

主な研修先： 国立ダナン大学医学薬学部看護学科
Nursing Division, Department of Medicine and Pharmacy National University of Da Nang

3/17 (土)	大阪―ハノイ (10:30-13:40)	ハノイ―ダナン (16:30－17:50) ホテル到着後ミニ会議	ホテル
3/18 (日)	9:30 オリエンテーション 10:00 市内視察	市内視察 15:00 ホストファミリー宅へ	ﾎｰﾑｽﾃｨ
3/19 (月)	ダナン大学表敬 大学内ツアー (41 Leduan Street, Danang City)	看護学生との交流会 （ダナン・神戸・自己紹介）	ﾎｰﾑｽﾃｨ
3/20 (火)	授業 (48 Cao Thang Street, HaiChau District)	ダナン女性と子ども病院視察	ﾎｰﾑｽﾃｨ
3/21 (水)	健康教育準備 (Danang University Village, Ngu Hanh Son District)	演習 (Danang University Village, Ngu Hanh Son District)	ﾎｰﾑｽﾃｨ
3/22 (木)	ダナン総合病院視察	ダナンがん病院視察	ホテル
3/23 (金)	幼稚園 健康教育実施 (Phan Ton Street, Hoa Quy ward, Ngu Hanh Son distric)	研修のまとめ合同会議 (The final summary) (91A NguyenThiMinhKhai, Danang City)	ホテル
3/24 (土)	ホイアン視察 (go to Hoi An)	ダナン―ハノイ (20:45-22:05)	機泊
3/25 (日)	ハノイ―大阪 (0:15-6:40)		

（備考）
・ホームステイは看護学生（日本語か英語が可能）宅で 1-2 名ずつの予定
・移動は大学バスあるいは看護学生のバイク同乗
・専属通訳(大学)は 3/19-3/23、添乗員(旅行会社)は全日程
・3/18 の市場、9-23 の昼食代、3/23 の夕食代、飲み物代（おしぼりは使用で支払い）、飲用水

もちもの：ユニホーム（靴は不要）、訪問先・ホームステイ先のお土産、レンタル wi-fi
両替（空港）、日よけ対策品、蚊よけ、常備薬（風邪、頭痛など）、ポカリ、

準備・役割分担：3/19 の自己紹介、プレゼン、健康教育（画用紙、マーカー、折り紙など）、最終まとめの会など
＊最終オリエンテーション（3 月）で再度確認します。

３）在外研究

	教員名（役職）	分野	テーマ	訪問先研究機関
2013	清水昌美（助教）	老年看護学	高齢者のケアの質を高める看護教育と実践	ロンドン市立大学
2014	藤井ひろみ（准教授）	ウィメンズヘルス看護学	米国にみる同性親家庭の親支援・子支援の実際	サンフランシスコ州立大学
2015	片倉直子（教授）	地域・在宅看護学	ワシントン大学の上級実践看護師教育の実際	ワシントン大学看護学部
2016	樫田美雄（准教授）	社会福祉学	臨床場面のコミュニケーションの動画分析	ウィスコンシン大学マディソン校
2017	池田清子（教授）	慢性病看護学	地域のレジリエンスを高める災害看護の役割	オーストラリア　フリンダース大学
2018	山本陽子（助教）	小児看護学	子どものアルドヒアランスを高める看護実践	Children's National Health System

関連業績

●宇多みどり，成瀬和子：地域住民による教育ボランティアを導入した看護演習の効果 - 生活者を支える在宅ケアのイメージを高めるために -, 日本看護学教育学会誌 ,24：79-88(2014).
●都筑千景 :「地域連携教育（コラボ教育)」を取り入れた看護専門職者の育成，医療提供体制見直しに対応する医療系教育実施のためのマネジメントの在り方に関する調査研究報告書 :115-117,151-161,(2014).
●岩本里織，高橋恭子，藤井ひろみ，小倉弥生，成瀬和子，奥山葉子，山下正，菊地慶子，有本梨花，宮下ルリ子，宇多みどり，嶋澤恭子，中山佳奈，都筑千景，高田昌代，川上英和，仲山佳美：いのちの感動体験に関する研究班 : 平成 25 年度臨床共同研究報告書 次世代育成事業「命の感動体験」を体験することによる小学生の「命の大切さ」に関する意識の長期的変化，(2014).
●小倉弥生，坪井桂子，清水昌美，小池香織，沼本教子 :「もの忘れ看護相談」相談事例からみた認知症高齢者を地域で支えるしくみづくりの検討- 遠距離介護者への支援と保健医療福祉の連携に焦点をあてて -, 第 15 回日本認知症ケア学会大会 ,2014.5. 東京 .
●辻佐恵子，二宮啓子，内 正子：A大学における子育て支援事業利用者のニーズと看護職による支援の明確化，日本小児看護学会第 24 回学術集 ,2014.7 東京.
●小池香織，清水昌美，小倉弥生，坪井桂子 : A氏の事例から見出される軽度認知障害 (MCI) の独居男性高齢者を地域で支えるための課題-「もの忘れ看護相談」の事例から-, 日本認知症ケア学会 2014 年度関西地域大会 ,2014.9. 大阪 .
●有本梨花, 岩本里織, 藤井ひろみ, 小倉弥生, 成瀬和子, 奥山葉子, 山下正, 宮下ルリ子, 宇多みどり，菊池慶子，中山佳奈，都筑千景，高橋恭子 :「命の感動体験」への参加で得られた小学生の意識の中期的変化 第 1 報，第 73 回日本公衆衛生学会総会 ,2014.10. 栃木 .
●山下正, 岩本里織, 藤井ひろみ, 小倉弥生, 成瀬和子, 奥山葉子, 有本梨花, 宮下ルリ子, 宇多みどり，菊地慶子，中山佳奈，都筑千景，高橋恭子 :「命の感動体験」への参加で得られた小学生の意識の中期的変化 第 2 報，第 73 回日本公衆衛生学会総会 ,2014.10. 栃木 .
●松葉祥一 : 神戸市看護大学と神戸市外国語大学による医療通訳・コーディネーター育成のプログラム開発の試み，シンポジウム「大学における医療通訳・コーディネーター育成の課題と可能性」, 神戸研究学園都市共同施設ユニティ ,2014.10. 神戸 .
●金川克子, 松葉祥一, 船山仲他, 藤代節, 福嶌教隆, 成瀬和子, 下地早智子, 川越栄子, 植本雅治, 山下正：医療通訳・コーディネーターの教育プログラムにおける外国語系大学と看護系大学による共同開発―外国語系大学と看護系大学における医療通訳に関する教育の実態, 保健の科学 ,57(6):425-429 (2015).
●松葉祥一, 金川克子, 船山仲他, 福島教隆, 下地早智子, 植本雅治, 川越栄子, 藤代節, 益加代子, 山下正, グレッグ美鈴, 嶋澤恭子, 岸田文隆, 金京愛, 村松紀子, 岡本悠馬, 加藤憲司, 成瀬和子：神戸市看護大と神戸市外大による医療通訳･コーディネーター育成のプログラム開発の試み，科研報告書 (平成 23-26 年日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (B), 研究代表者 : 金川克子「医療通訳・コーディネーターの看護大学と外国語大学の共同による実践的教育プログラムの開発」),3-11(2015).
●新田和子, 竹橋美由紀, 嶋澤恭子, 山本和代, 成瀬和子：ベトナム・ダナン産婦人科小児科病院にお

ける「体系的な新人教育プログラムの構築」の取り組みに関する報告 , 神戸市立病院紀要 ,54：15-20(2016).

●小池香織，清水昌美，波田弥生，秋定真有，小澤和弘，坪井桂子：地域で暮らすもの忘れや認知症の悩みのある人への情報発信に向けた「もの忘れ看護相談」内容の分析 , 第 35 回日本看護科学学会学術集会 ,2015.12. 広島 .

●石原逸子：地（知）の拠点整備作業における地域との連携体制構築 ; 学外講義・演習の充実に必要な地域住民との連携 , シンポジウムⅠ 臨地教育の充実をめざした臨地と教育の連携体制の構築 , 日本看護学教育学会 , 第 25 回学術集会 ,2015.8. 徳島 .

●嶋澤恭子，内正子，新田和子，山本和代，竹橋美由紀，成瀬和子，二宮啓子：ベトナム・ダナン産婦人科小児科病院における新人教育への取り組み -JICA 草の根技術協力事業での一つの評価として -, 国際看護研究会 , 第 18 回学術集会 ,2015.9. 横浜 .

●新田和子，山本和代，竹橋美由紀，嶋澤恭子，内正子，成瀬和子，二宮啓子：ベトナム・ダナン産婦人科小児科病院における看護職研修生の変化 , 国際看護研究会 , 第 18 回学術集会 ,2015.9. 横浜 .

●澁谷幸,柴田しおり,玉田雅美,後藤由紀子,江口由佳,堀田直孝,山本純子,中本明世,赤田いづみ,谷川千佳子:模擬患者参加型技術演習に参加した臨地実習指導者の経験－学校－臨床間をつなぐ学習の場としての看護技術演習の可能性－,日本看護学教育学会誌,26(2):69-81 (2016).

●嶋澤恭子,内正子,成瀬和子,竹橋美由紀,新田和子,山本和代,二宮啓子,植本雅治:ダナン産婦人科小児科病院における新人教育への取り組み－JICA 草の根技術協力事業への参画を通して－,神戸市看護大学紀要,20:85-91 (2016).

●清水昌美,秋定真有,石井久仁子,波田弥生,上瀬芙美代,小澤和弘,坪井桂子:「もの忘れ看護相談」来所者の健康管理行動とその背景にある思い－心身の変化への不安をもつ２事例の分析－,第36回日本看護科学学会学術集会,2016.12.東京.

●石原逸子:地域包括ケアを実現するための教育ボランティアとコラボ教育の実際,看護展望,41(10):36-41 (2016)

●嶋澤恭子，内正子，高山良子，新田和子，山本和代，竹橋美由紀，二宮啓子:JICA ダナン研修プロジェクトにおけるベトナム看護職への教育支援の経験
Cultural Competency に着目して，神戸市看護大学紀要,21 ： 79- 86(2017).

●清水昌美，波田弥生，秋定真有，上瀬芙美代，小澤和弘，坪井桂子：もの忘れの気がかりがある人の表出されにくいニーズと支援のあり方,第 37 回日本看護科学学会学術集会,2017.12.仙台.

●澁谷幸,柴田しおり,玉田雅美,稲垣聡,花井理紗,大屋庄平,福田朗子：臨地実習指導者・地域住民が参加する看護技術演習の実際からみた教育の現状と課題,第 3 回神戸看護学会学術集会,2018.10. 神戸

神戸市看護大学　地域連携教育・研究センター
実績報告書（2014-2018 年）

編集日　2020 年 3 月 31 日
発行日　2020 年 8 月 15 日
発行者　神戸市看護大学
〒 651-2103　神戸市西区学園西町 3-4
TEL 078-794-8080　FAX 078-794-8086